Title	親子關係の心理學的研究(第一報告)
Author	中西, 昇 / 小西, 勝一郎 / 谷, 嘉代子
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 1 巻 4 号, p.1-41.
Issue Date	1954-03
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

親子關係の心理學的研究

第　一　報　告

中　西　　昇
小　西　勝　一　郎
谷　　嘉　代　子

序　　論

児童の人格形成に対して幼時の家庭環境が大きな役割を果すことは、一般に認められているところであり、之に関して心理学、教育学、社会学の立場から種々の研究が行われている。

この研究の方法はそれぞれ学問の分野によつて異るが、その一つの大きな目的は、一方に於て家庭環境に於ける一つの特徴を、他方に児童の人格特徴を見出し、両者の関係の有無或はその程度を知ろうとする点にある。家庭環境の条件として例えば親の有無（欠損家庭など）家屋の広さ、家庭の経済的状況、親の職業などを一方に於て求め、他方に児童の人格特徴（非行の有無の如き）を求め両者の相関関係を見出す研究の如きは、古くより行われている。(1)

家庭環境の特徴は、しかし、之等の条件を単に加算したものではない。多くの物的、社会的、文化的条件の錯綜した全体として存し、一つの有機体を形成している。

しかし、児童にとつて直接的な条件は、家庭内に於ける人間関係である。人間関係は何れ相互的であり、この人間関係の総体が家庭の雰囲気を形成するものであるが、家庭内に於ける心理的態度である。特に幼児にとつては親の態度が大きな意味をもつと考えられる。(2)

事実、たとえば家庭環境と児童の非行との相関的研究に於ても、単に親の有無のみならず、親の子に対する態度が重視せられるようになつている。(3)

われわれの研究も、親の子供に対する態度と、子供の人格特徴との関係を明らかにせんとする一つの試みである。

かかる研究に当つては多くの問題が考えられる。

(1) 親の子に対する態度は通常、質問紙或は面接によつて、親自身が自己の態度を供述する方法と(4)第三者の観察による方法とが考えられる。(5)

---

(1) 少年の非行と親の種々の社会的条件との関係は Burt, Healy 以下多く行われている。或は Riemer は親の不在が子供の人格発達に悪影響をもたらすことを調べている。
Riemer, M.D. ; The Effect on Character Development of Prolonged or Frequent Absence of Parents. *Mental Hygiene*. Vol 33. No. 2. 1949.

(2) Cattell は個人の Personalityと類比的に家庭の Syntality を考える。Cattell, R.B. ; Personality. 1950

(3) 例えば Kvaraceus, W.C. ; Juvenile delinquency and the School. Yonkers, World Book, 1945.

(4) 例えば Radke, M.J. The Relation of Parental Authority to Children's Behavior and Attitude 1946.

(5) 例えば Lasko, J.K. ; Parent-Child Relationships ; Report from the Fels Research Institute *Am. J. Orthopsychiat*. 1952.

この場合、親の態度は叙述形式によつて記述されることもあれば(6)一定の範疇に随つて品等されることもある。(7)

或は親の態度として、親自身が自認する態度をとるのではなく、子供より見た親の態度を問題とする場合がある。(8)

この何れが子供の行動特性により多く関係するかも問題であるが、この二つの態度の一致又は差異の研究、更に進んでは、この一致程度と子供の人格特性との関係を取上げる行き方もある。(9)

親の子供に対する態度が、如何にして形成せられるかという問題もある。親がその親から受けた態度との関係(10)、或は親になる前にもつた観念との関係などの研究も行われている。(11)

子供が親に対する態度の測定法としては質問紙法、面接法、或は投影法(12)などが用いられている。

或は、親の子供に対する個々の態度ではなく、親を中心とした家庭の全体的力動的構造特性を何らかの形で把み、之と子供の人格特性とを結付けんとする試みもある。(13)

(2)　子供の人格特性あるいは行動特性の測定に当つては、多くの人格診断テストを用いることが可能であるが、この他教師又は実験者の行動観察記録、非行の有無や性質の記録なども手がかりとなる。人格全体についての評価を用いることもあれば、何らかの特定の行動項目に限定する場合も

---

(6)　例えば　Bühler Ch. ; The Child and his Family. 1940.

(7)　例えば　Baldwin A.L. ; Socialization and the Parent-Child Relationship. *Ch, Develop.* vol 19. No. 3. 1948.

(8)　子供の親に対する態度の研究は多い。

Gardner L.P. ; An Analysis of Children's Attitude toward Fathers. *J. Genet, Psychol.* 70. 1947.

Jurovsky A; The Relation of older Children to their Parents. *J. Genet. Psychol.* 72. 1948.

Cass L; An Investigation of Parent-Child Relationships in Terms of Awareness, Identification, Projection and Cntrol. *Am. J, Orthopsychiat.* 1952.

Ammons R.B. and Ammons H.S.; Parent Preference in Young Children's Doll-Play Interviews. *J. abn. soc. Psychol.* 44. 1949.　など。

西平直喜　「青年両親」関係の心理学的研究、講談社、1952.

(9)　Cass. (8)

(10)　Field, M ; Maternal attitude found in Twenty-five Cases of Children with Primary Behavior Disorder *Am. J. Orthopsychiat.* 10. 1940.

McFarlane, J. W. ; Family Influence on Children's Personality Development. *Childhood Education*, 15. 1938.　その他上述　Cass. Radke　など。

(11)　Itkin, W.: Some Relationships between Intra-family Attitudes and Pre-parental Attitudes toward Children. *J. Genet. Psychol.* 80. 1952.

(12)　投影法は Radke, Ammons　等が用いている。彼等は同時に質問紙法、或は面接法を併用し両者の関係を調べている。

(13)　例えば辻は家族の序列を子供に品等させている。

辻正三、家庭に於ける人間関係考究の一つの試み。人文学報、10.　1953.

ある。(14)

之等がプロフィルとして用られることもあり、品等尺度として現わされる場合もある。

以上親子関係の子供の人格に及ぼす影響の研究に関しては、多くの実験又は調査の手がかりとなる示標があり、また測定法も種々可能であるために、多くの面からの追究が可能となつて来る。(15)

更に又、親の子に対する態度として取上げる項目も種々である。例えば Symonds (16) は従来の研究を通観して二種の態度に大別する。(a) Acceptance-Rejection (b) Dominance-Submission である。Radke は6系別を設定する。(Ⅰ) 民主的—専制的、(Ⅱ) 制限の厳格—緩和 (Ⅲ)叱責の厳重—寛大、(Ⅳ)親密—疎遠、(Ⅴ)養育責任母—父、(Ⅵ)同胞間の調和—不調和である。この中、親の子供への態度は(Ⅰ)より(Ⅴ)までが考えられる。Lasko は暖かさ、傾倒、物わかり、民主的、拘束性等の品等の Cluster を考える。

かくして、親の態度として何を徴標とするか、如何なる測定法を用いるか、態度の範疇を何にとるか、の組合せによつて研究は多岐となる。

われわれは、第Ⅰ部に於ては (1)親の子供への態度と子供の親への態度の測定として親への質問による質問紙を用うる方法を選び、(2)子供の行動測定には教師の品等を用いて両者の関係を追究し、第Ⅱ部に於ては子供の行動評価に Amen と Temple の考案した投影法を用い、親の態度とその方法によつて得られる人格特徴との間の関係の有無を調べると共に、Amen-Temple 法の適用可能性に関する検討を併せて行つた。(17)

---

(14) 例えば Miles は Leadership のみを取上げ、Nowlis は攻撃的と、依存的行動のみを考察する。Nowlis. V; The Search for Significant Concepts in Study of Parent-Child Relationships. *Am. J. Orthopsychiat.* 1952.

(15) 以上の他に、精神分析的な立場よりの Case study も存する。親子関係は精神分析に於ては Freud.S 以来重視されているが、ここでは取上げない。

(16) Symonds. P.M. The Psychology of Parent-Child Relationship. 1939.

(17) 第Ⅰ部の方法は殆んど Radke のそれを踏襲したが、之は一つには彼の質問項目が詳細を極めていることと、彼がアメリカに於て得た結果と、日本に於けるとそれとの比較に便ならしめるためである。しかし質問紙法そのものに伴う欠点が存するために第三者の行動観察をすれば 又自ら異つた特徴が出るかも知れない。第Ⅱ部に於て投影法を用いた当初の目的は、之によつて親の態度に関する子供の認知を知ることであり、この子供の認知構造と人格特性との関係を追究せんとするためであつた。しかし本来 Amen-Temple のテストがこの目的のために作製されていないために、この目的のために用いることは不可能となつた。本テストの当初の目的に沿つて児童の人格評価の一手段として用いることとなつた。

したがつて第Ⅰ部第Ⅱ部共に、親の態度の測定は質問紙法によつて求め、人格特性の測定に於て、教師の品等と投影法を用いるという差があるわけである。

本研究室に於ては親子関係の心理学的研究を種々の角度から、種々の方法を用いて行つて来ているが、本論文はその第一報告である。

このテーマに関する総合的な企画と整理は中西が担当しているが、本報告の第Ⅰ部は主に小西が、第Ⅱ部は主に谷が分担した。故に全体的責任は中西が負うべきものと考える。

第　1　部

主目的　Radke(4)の方法に準じて質問紙法を用いて親の子供に対する態度が、教師の品等による子供の人格特性と如何なる関係をもつかを明かにせんとする。

副目的(1)親の子供への態度が、己れが幼時にうけた親の訓育態度による影響を質問紙法によつて明らかにせんとする。(18)

(2)　親の子供への態度が父母の別、親の教育程度及び経済的狀況による差異を検討する。(19)

(3)　子供が親の態度を如何に認めるかを調べ親子間の態度の一致を検討する。

手続及び方法

質問紙（別表）の項目により、実験者は父母並びに子供に対して面接質問する。質問項目は親に対するもの127、子供に対するもの53、（別表参照）

親の答は強度又は頻度に応じて四段階に分類する。実験者はこの質問と共に四段階(20)を告げ、その何れに該当するかの供述によつて check するわけである。子供への質問は該当項目の有無を記入する。

子供への質問はそれぞれ幼稚園又は保育所の一室に於て実験者と２名きり差し向いで行い、母親への質問はそれぞれの子供の家庭を訪問し、面接の上行つた。父親には面接困難であり、大部分は質問紙を預け記入の上返送してもらつた(21)

Radke は親への質問項目を若干の態度の範疇にまとめ、その態度の操作的基準を与えている。その内容は下記の通り。

---

(18)　親の子供への態度が、親の子供時代の経験によることを Field, MacFarlane (10) は指摘した。

Itkin は親の態度の発達に関する条件として、親子間の経験、両親の結婚の適応、両親とその父母及び同胞との間に於ける結婚前の経験、第三者からの学習などを考える。

本研究に於ける親がその親よりうける態度の影響は、親の子供への態度を規定する一つの要因にすぎない。しかも、祖父母（児童を中心としての）への質問ではなく、親の幼時に受けた親の態度の記憶に基くために之によつて祖父母の態度がそのまま親に伝達されたるか否かは決め難い。親の幼時の記憶が、児童への態度に及ぼす影響を知るに止まる。しかし序論に述べた如く、子供の認知する親の態度も親の態度の意義をもつといえる。

(19)　例えば Koch は子供の自由に対する親の態度と測定して、親の教育程度と、子供の自由の尊重との間に関連があるという。辻も父母の教育程度による親子関係の相違を分析している。

なお、教育程度や経済状況とは別個に民族による親の子供への態度の差も、かかる態度が文化的要因によつて決定され易いと考えられるために、当然予想せられる。Davis と Havighurst は Negro と White との親の態度を研究している。

Koch, M.L.; Scale for Measuring Attitudes toward the Question of Children's Freedom. *Ch.develop.* 5. 1934.

辻正三　家庭に於ける児童成人関係、児心、 Vol 7. No. 9.; Davis A and Havighurst K.J.; Social Class and Color Differences in Child Rearing. *Am. Soc. Rev.* 11. 1946.

(20)　Radke は三段階にまとめている。われわれはそれに「全くない」の一段階を追加した。

(21)　したがつて目的の(2)は data 入手の経路が異るために、十分には追究し得られないこととなつた。

i) 権威の原理（Philosoply）民主的—専制的

項 目 (3. 8. 51. 65. 75. 79. 116. 117)

基 準 専制的雰囲気

a) 両親が全ての方針を決定する。

b) 子供の活動が両親によつて指定される。両親の次の行動は子供にわからない。

民主的雰囲気

a) 全ての方針は家族の決定する問題

b) 子供は行為の方針を説明することによつて見透しを与えられる。

ii) 両親の拘束 厳しい、確固としている——弛い、呑気

項 目 (7. 10. 22. 24. 25. 32. 38. 50. 74. 76. 108. 110. 112)

基 準 厳しい、確固たる躾

a) 子供の行動拘束の境界が両親によつて確実に維持される。

b) 子供が両親の拘束を逃れることは非常に難かしい。子供の反抗的企ては全く受付けられない。

弛い、呑気な躾

a) 子供の行動に対する拘束の境界が両親によつて維持されることは不完全で弱い。

b) 子供はかなり容易に両親の拘束から逃れうる。両親の拘束は子供の反抗によつて崩れる。

iii) 罰の厳しさ、厳しい—優しい

項 目 (39. 49. 64. 67. 78. 97)

基 準 厳しい

a) 両親が子供に与える罰を厳しいと感ずる。

優しい。

a) 両親が子供に与える罰を優しいと感ずる。

iiii) 親子間の親疎関係、良—不良（父と母に区別）

項 目 (22. 44. 48. 52. 54. 62. 70. 71. 86. 99. 109. 113. 118. 119;4. 41. 46. 52. 54. 55. 56. 71. 85. 86. 113. 115. 118. 119)

基 準 良き関係

a) 両親は子供の問題と活動に注意する。両親は子供の興味あることに参加する。

b) 子供は両親にその考えを打あける。

c) 親子互に積極的愛情関係にある。

d) 親子間に不快な情緒的関係がない。

不良の関係

a) 両親は子供の問題と活動にあまり注意を払わない。子供の興味にあずからない。

b) 子供は両親に考えを打明けない。

c) 親子間に積極的愛情関係が不足している。

d) 親子間に不快な情緒的関係がある。

v) 子供の躾における父母の相対的責任

平等の責任—不等の責任、

項 目 (5. 21. 88. 102)

基 準 平等

a) 父母が等しく躾の責任をもつ

b）子供が父母に等しく従ふ。

不平等

a）子供の躾について片方の親が多くの責任をもつ

b）子供が片方の親に多く従う

vi）同胞関係　調和的—不調和的

項　目　(26. 27. 29. 30. 81. 82. 83. 84)

基　準　調和的

a）矛盾しない同胞間の関係

不調和的

a）矛盾した同胞関係

われわれも一応この範疇に随つて結果を整理した。

尙4段階にはそれぞれ3、2、1、0の段階点を与えたが之も Radke に準じたものである。

実験對象と期日

(1)　大阪市立愛珠幼稚園、生野保育所、福島保育所に在籍する一年保育児童の両親、計73組、児童は151名（男71名女80名、幼111名保40名）

(2)　昭和26年7月より10月まで

結果及び結果の考察

（A）　親の子供に対する態度

(1)　親の態度と祖父母の態度の比較。（副目的1）

親の記憶による祖父母よりうけた態度と親の供述する子供への態度の比較は第1表a、bに示すごとくである。a表はその間に有意な差の認められる項目であり、b表は有意な差の認められなかつたものである。

第1表a　祖父母と両親の反応の比較

質問項目	範疇		父母 積極的a	父母 消極的b	祖父母 積極的c	祖父母 消極的d	X^2 有意水準	a.cのCR b.dのCR	Radke 有意性の有無
子供にも発言権がある (3. 79)	権威関係	実数	42	101	19	125	11. 44	3. 18	あり
		%	29%	69%	13%	85%	P<0. 01	3. 35	
子供は監視すべきで言うことを聞くべきでない (8. 75)	権威関係	実数	57	68	88	53	18. 32	3. 27	あり
		%	39%	47%	60%	36%	P<0. 01	1. 78	
父は子供を厳しく叱る (49. 78)	罰の関係	実数	37	32	57	35	25. 99	1. 71	あり
		%	51%	43%	39%	24%	P<0. 01	3. 01	
父は子供をおだやかに叱る (67. 97)	罰の関係	実数	64	7	58	76	10. 12	6. 74	あり
		%	87%	9%	39%	52%	P<0. 01	6. 12	
父は子供に対して厳格である (7. 74)	拘束関係	実数	50	21	72	69	11. 02	2. 58	あり
		%	69%	28%	49%	47%	P<0. 01	2. 45	
父は子供に対してやさしい (32. 110)	拘束関係	実数	27	38	113	28	35. 53	5. 40	なし
		%	38%	52%	77%	19%	P<0. 01	4. 68	

子供は私の言うことをきかず思い遣りのことをする (38.108)	拘束関係	実数	27	114	17	122	16.79	1.67	あり
		%	18%	78%	11%	84%	P<0.01	1.17	
私は子供を好きなようにさせる (50.112)	拘束関係	実数	118	24	85	59	20.78	4.20	なし
		%	81%	16%	58%	40%	P<0.01	4.51	
母は子供と一緒に考えたり心配したりする (20.119)	親疎関係	実数	69	3	61	81	56.66	7.50	あり
		%	94%	4%	42%	55%	P<0.01	7.38	
父は子供と一緒に考えたり心配したりする (4.119)	親疎関係	実数	64	5	35	107	106.58	8.74	あり
		%	87%	7%	24%	73%	P<0.01	9.22	
私は子供の質問に忙しくて答えられない (54.86)	親疎関係	実数	64	80	38	102	7.73	3.19	あり
		%	44%	55%	26%	70%	P<0.05	2.65	
母は子供と一緒に遊ぶ (70.71)	親疎関係	実数	66	7	60	80	46.44	6.93	あり
		%	90%	9%	41%	55%	P<0.01	6.45	
父は子供と一緒に遊ぶ (55.71)	親疎関係	実数	68	4	57	82	58.36	9.57	あり
		%	93%	5%	39%	56%	P<0.01	7.26	
子供は私が怒ると腹をたてる (52.113)	親疎関係	実数	46	83	91	53	33.23	5.27	なし
		%	31%	53%	62%	36%	P<0.01	3.52	
母は子供に愛情を示す (53.118)	親疎関係	実数	56	3	94	37	16.00	1.85	あり
		%	76%	4%	64%	25%	P<0.01	3.01	
父は子供に愛情を示す (63.118)	親疎関係	実数	69	3	86	52	7.34	5.64	なし
		%	94%	4%	59%	36%	P<0.05	5.06	
子供に恥をかかせるようにして叱る (15.92)	躾の技術	実数	4	138	20	126	4.77	3.39	あり
		%	3%	95%	14%	86%	P<0.05	2.38	
子供を叱る時叩く (11.89)	躾の技術	実数	123	23	36	108	100.02	10.23	あり
		%	84%	16%	25%	74%	P<0.01	10.00	
子供が悪いことをした時もう可愛がらないといつて戒める (18.95)	躾の技術	実数	34	98	20	126	1.00	2.11	なし
		%	23%	67%	14%	86	0.5<P<0.7	3.88	
子供が誤りを犯した時当然の償いを受けるようにしむける (17.94)	躾の技術	実数	63	75	43	89	13.93	7.97	なし
		%	47%	51%	29%	61%	P<0.01	7.38	
子供は何をしたら叱られるか前から知つている (47.87)	躾の一貫性	実数	107	33	72	51	20.64	2.03	あり
		%	73%	23%	49%	35%	P<0.01	2.27	
子供は思い通りにならぬ時泣きわめきかんしやくを起す (33.105)	要求実現の方法	実数	65	71	47	94	7.34	3.06	あり
		%	44%	49%	32%	64%	P<0.05	2.71	
子供は思い通りにならぬ時不機嫌強情になる (34.106)	要求実現の方法	実数	71	71	50	91	6.22	2.49	なし
		%	49%	49%	34%	62%	P<0.05	2.32	

第1表b　祖父母の反応の比較

質問項目	範疇	傾向	グループ別	%	Radkeに於ける有意性有無
無条件に父母の言うことを望む(51.116)	権威関係	専制的	父母	64	あり
			祖父母	73	
叱る時にその理由を言う (65.117)	権威関係	民主的	父母	88	あり
			祖父母	77	
子供を厳しく叱る (64.78)	罰の関係	厳罰	母	65	なし
			祖母	56	
子供をおだやかに叱る (39.97)	罰の関係	寛大	母	78	あり
			祖母	71	
子供に厳格である (22.74)	拘束関係	拘束	母	68	なし
			祖母	56	
子供にやさしい (25.110)	拘束関係	自由	母	24	なし
			祖母	50	
子供にまける (10.76)	拘束関係	自由	母	42	なし
			祖母	53	
子供にまける (24.76)	拘束関係	自由	父	41	なし
			祖父	52	
母を恐れている (44.109)	親疎関係	不良	父母	29	あり
			祖父母	41	
母を好いている (48.99)	親疎関係	良好	父母	94	あり
			祖父母	94	
父を恐れている (56.115)	親疎関係	不良	父母	43	あり
			祖父母	50	
父を好いている (41.85)	親疎関係	良好	父母	86	あり
			祖父母	86	

i)　権威関係については、子供の発言権と子供の監視に関して、祖父母の方が父母よりも専制的態度をとることが多い。しかし、Radke の研究では権威関係の全項目にこの傾向が有意に現われている。

ii)　罰の寛厳については、祖父と父の間に差が認められ、祖父より父の方が寛大である。

iii)　拘束関係については、父の方が祖父よりもやさしくないものが多いというのと、父母の方が子供がいうことを聞かないという相矛盾した結果が現われている。

iv)　親疎関係については、父母は祖父母よりも子供に親しい関係にあるといえる。

以上一般に親は子供に対して自己がうけたよりも、良好なる態度をもつと考えている傾向をうかがい得る。

(2) 父母間の態度の比較（副目的２）

第２表a、bの通り、（a、bの意味は第１表と同じ）

表に明らかな如く父母の態度に有意な差の存するものは極めて少ない。父は母よりも子供から忘れられる、母は父に比して子供に対して呑気でないなどに差が認められる。

第２表a　父と母の反応の比較

質問項目	範疇		父		母		x^2	acのCR	Radke
			積極的a	消極的b	積極的c	消極的d	有意水準	bdのCR	有意性の有無
子供は私を恐れている (109.115)	親疎関係	実数	33	35	15	58	10.05	3.17	なし
		%	46%	48%	20%	80%	P<0.01	5.82	
私は子供に対して呑気である (110)	拘束関係	実数	27	38	18	55	2.60	1.60	なし
		%	36%	52%	24%	6%	0.1<P<0.2	2.90	
子供が言つけを聞けば褒美をやる (93)	躾の技術	実数	47	24	59	13	6.16	2.22	なし
		%	64%	32%	80%	18%	P<0.05	2.09	

第２表b　父母間の反応の比較

質問項目	範疇	傾向	グループ別	%	Radkeにおける有意性の有無
子供を監視すべきと思う (75)	権威関係	専制的	父	45	なし
			母	45	
子供に発言権あり (79)	権威関係	民主的	父	27	
			母	31	
子供が無条件にきくことを望む (116)	権威関係	専制的	父	66	なし
			母	62	
叱る時に理由をいう (117)	権威関係	民主的	父	84	あり
			母	91	
きびしい罰を与える (78)	罰の関係	厳罰	父	54	なし
			母	66	
子供をおだやかに叱る (97)	罰の関係	寛大	父	90	なし
			母	78	
私は子供にまける (76)	拘束関係	自由	父	41	なし
			母	44	
子供は私の言うことをきかない (108)	拘束関係	自由	父	21	なし
			母	16	
子供を好きなようにさせる (112)	拘束関係	自由	父	81	あり
			母	84	
子供に厳格である (74)	拘束関係	拘束	父	70	なし
			母	75	

子供と一緒に遊ぶ (71)	親疎関係	良　好	父	94	な　し	
			母	90		
子供は父を好いている (85)	親疎関係	良　好	父	86	あ　り	
			母	85		
子供の質問に答えられない (86)	親疎関係	不　良	父	48	あ　り	
			母	40		
子供は母を好いている (99)	親疎関係	良　好	父	90		
			母	96		
叱ると子供は腹をたてる (113)	親疎関係	不　良	父	35	な　し	
			母	35		
子供に愛情を示す (118)	親疎関係	良　好	父	95	あ　り (母>父)	
			母	95		
子供は考えをうちあける (119)	親疎関係	良　好	父	95	な　し	
			母	95		

(3)　親の経済状況別による態度の比較

本研究に選んだ幼稚園は大阪市の商業中心地にあり、園兒の両親はこの中心地に於て中流以上の生活を営んでいるに対し、二つの保育所は共に環境不良貧困地域に位置し、その園兒の両親は殆んど経済的に惠まれていない階層に属している。また両群の父の職業を比較するとき、保育所群は半技能、未熟練労働者が多く、幼稚園群とは1％の危険率で以て区別せられる。之等の理由を以て、幼稚園群を経済的に良群、保育所群を不良群として区別し、両者の親としての態度を比較した。なお良群の両親は43組86名、不良群は30組60名である。

両群の態度の比較は第3表a、bの通り、（a,bの意味は前表と同じ）

第3表b　経済状況別による反応の比較

質問項目	範疇		良群		不良群		x^2	a, c の CR
			積極的a	消極的b	積極的c	消極的d	有意水準	b,d の CR
私は子供と遊ぶ (71)	親疎関係	実数	84	1	50	10	9.82	3.11
		%	97%	1%	63%	16%	P<0.01	4.02
私は忙しくて子供の質問に答えれらぬ (86)	親疎関係	実数	31	53	33	27	5.14	3.70
		%	36%	61%	55%	45%	0.05<P<0.1	1.99
子供が悪いことをした時当然の報いをうけるようにしむける (94)	躾の技術	実数	49	37	19	38	9.11	3.02
		%	57%	43%	31%	63%	P<0.02	2.42
子供を叱る時父親が当る (88)	父母の役割	実数	44	41	20	38	4.97	2.14
		%	51%	48%	33%	63%	0.05<P<0.1	1.87
私はおてんば、ごんたより上品なおませさんが好きである (124)	親の希望	実数	40	41	36	17	6.02	2.32
		%	46%	48%	60%	28%	P<0.05	2.32

第3表b　経済状況別による比較

質問項目		範疇	傾向	グループ別	%
子供は監視すべきである	(75)	権威関係	専制的	良	47
				不良	43
子供は発言権がある	(79)	権威関係	民主的	良	29
				不良	29
子供は無条件に開くことを望む	(116)	権威関係	専制的	良	58
				不良	73
叱る時に理由をいう	(117)	権威関係	民主的	良	89
				不良	84
罰は厳しい	(78)	罰の関係	厳罰	良	62
				不良	55
おだやかに叱る	(97)	罰の関係	寛大	良	86
				不良	80
子供に厳格である	(74)	拘束関係	拘束	良	71
				不良	73
子供にまける	(76)	拘束関係	自由	良	34
				不良	50
子供は言うことをきかない	(108)	拘束関係	自由	良	18
				不良	18
子供に呑気である	(110)	拘束関係	自由	良	30
				不良	31
子供の好きなようにさせる	(112)	拘束関係	自由	良	78
				不良	85
子供は父を好いている	(85)	親疎関係	良好	良	83
				不良	90
〃　母　〃	(99)	親疎関係	良好	良	97
				不良	99
〃　父を恐れている	(115)	親疎関係	不良	良	43
				不良	43
〃　母　〃	(109)	親疎関係	不良	良	24
				不良	35
子供は叱ると腹をたてる	(113)	親疎関係	不良	良	37
				不良	26

上表より親疎関係においては子供と共に遊ぶ親は良群に、子供の質問に答えられないものは不良群に多い。

躾の技術の点では子供の非行の場合当然その報いをうけるような態度を示すのは、良群に多い。躾において父の占める役割は良群の方に大きくみられる。

(4)　親の教育程度による比較

親の教育程度の徴標として、中等学校卒業以上と不卒業とに区別した。前者（高群）55名、後者（低群）は91名である。この区別による態度の比較は第4表 a、b の反応に示される。

（i）権威関係においては、無条件に親に服することを求めな

子供に愛情を示す	(118)	親疎関係	良　好	良	97
				不　良	93
子供は何事も打あける	(119)	親疎関係	良　好	良	97
				不　良	89

い、叱るときは理由をいうなどについては高群の方が多い。

(ii) 親疎関係については高群の方がよい関係をもつ傾向がある。

(iii) 躾の技術に関しては思い通りにならぬとき子供が従順になるのは高群に多く、子供を赤ん坊扱いするは低群に多い。子供の上品さを望むものも低群に多い。

第4表a　教育程度別による態度の比較

質問項目	範疇		高群 積極的a	高群 消極的b	低群 積極的c	低群 消極的d	x^2 有意水準	a,c の CR / b,d の CR
親の言うことを無条件に聞くことを望む (116)	権威関係	実数	39	11	52	38	11.18	1.66
		%	70%	20%	57%	41%	P<0.01	2.70
子供を叱る時その理由を言う (117)	権威関係	実数	42	10	84	7	3.66	2.70
		%	76%	18%	92%	7%	0.05<P<0.1	1.92
子供と一緒に遊ぶ (71)	親疎関係	実数	43	8	88	3	6.22	2.49
		%	78%	14%	96%	3%	P<0.02	2.36
子供に愛情を示す(118)	親疎関係	実数	47	5	88	1	6.85	2.49
		%	85%	9%	96%	1%	P<0.05	2.36
子供はその考えを私に打明ける (119)	親疎関係	実数	45	6	89	2	3.48	2.95
		%	81%	11%	97%	2%	0.05<P<0.1	1.86
子供は思い通りにならぬ時諦めて私の言うことをきく (104)	躾の技術	実数	42	7	59	32	2.13	1.46
		%	76%	12%	64%	35%	0.2<P<0.3	2.97
私は子供を赤ん坊あつかいする (120)	躾の技術	実数	11	37	36	55	6.00	2.47
		%	20%	67%	40%	60%	P<0.05	0.83
私はおてんばごんたより上品なおませさんが好きである (124)	親の希望	実数	32	14	44	44	0.68	2.47
		%	58%	25%	48%	48%	0.7<P<0.8	0.83

第4表b　教育程度別による反応の比較（有意性の認められぬ項目）

質問項目		範疇	傾向	グループ	%
子供を監視すべきと考える	(75)	権威関係	専制的	高	39
				低	53
子供に発言権がある	(79)	権威関係	民主的	高	31
				低	26
子供に与える罰は厳しい	(78)	罰の関係	厳　罰	高	80
				低	60

(A)の要約

(1) 親の態度の世代による相違は著明である。現在の両親は祖父母よりも子供に対してより民主的であり、親

おだやかに叱る	(97)	罰の関係	寛　大	高	88
				低	77
子供に対して厳格である	(74)	拘束関係	拘　束	高	71
				低	73
子供に負ける	(76)	拘束関係	自　由	高	40
				低	48
子供は言うことをきかない	(108)	拘束関係	自　由	高	20
				低	15
子供について呑気である	(110)	拘束関係	自　由	高	30
				低	32
子供の好きなようにさせる	(112)	拘束関係	自　由	高	86
				低	76
子供の質問に答えられない	(86)	親疎関係	不　良	高	40
				低	59
母を好いている	(99)	親疎関係	良　好	高	97
				低	98
母を恐れている	(109)	親疎関係	不　良	高	26
				低	36
叱ると子供は腹をたてる	(113)	親疎関係	不　良	高	36
				低	33

密関係をもつと考えている。

(2) 父母間の差は僅少であるが母の方が子供に対してより親密であると共に、拘束することも強いと考える傾向がある。

(3) 経済的に良好なる家庭の両親は、子供により親密な関係をもつ傾向がある。

(4) 教育程度の高い親は、権威関係、親疎関係に於いて、子供に良い関係を作つている。

(5) 以上の傾向は大体 Radke の結果と一致する。

(B) 子供の親に対する態度（副目的３）

子供への質問は53項目よりなり、全て両親の態度と関連をもつが、結果を上と同じく経済的良、不良群別、或は父母別に整理し、特に必要なるものを除き、有意な差の見出されたもののみ掲げる。

〔１〕親の罰に対する子供の態度

（a） 子供に対する叱り方の種類、並びに叱る人については第５、６、７表の通り。

之等の表は何れも、児童が親より受ける罰を、児童の側より見た、全体的傾向である。

第５表　悪いことをした時どんなことが起るか（質問９）

種類	叱られる	叩かれる なぐられる	諭される	誰も叱らない	悪さしない	無　答
%	55	3	0.6	3	0.3	38

第６表　誰が叱るか　(9)

叱る人	父	母	父　母	兄	姉	祖　母	其他及無答
%	30	39	7	7 (10)	5 (10)	2 (4)	14

（括弧内は実際に当該者（兄姉など）をもつ子供の数に対する百分比を示す）

第7表　悪い事をした時父母はどうするか (10,11)

種類 / 父母別	叱る		叩く		押入に入れる		注意する		其他無答		計
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
母	72	48	45	29	7	5	18	12	9	6	151
父	61	40	48	32	10	7	4	3	28	18	151
計	133	44	93	30	17	6	22	7	37	12	302

父母間の比較 $X^2=20.18$　$P<0.01$

「注意する」……父母間の比較 CR=3.60　母>父

叱られると答えるものが圧倒的に多い。先の両親の表明に於ては子供に対して叩く、隔離する傾向の強いものは夫々26%と5%であるが、子供自身は自己のうける罰として之等より多くの数値(30%と6%)に於いて表明し、ここに両者の罰に対する態度の差が窺われる。Radke は隔離を33%見出しているが、之などは文化の相違の一つの示標かも知れない。

処罰者としては、父母を挙げるものが最も多く、その他のものと比較するとき CR=7.53 を示す。

(b) 父母の叱り方に於ける相違は第7表によれば、有意の差が存する。「注意する」は母の方に多い叱責形式である。

叱責の強さに関しては、第8表の如き結果であり、父の強い叱責の場合の方が母のそれよりも多い。(CR=5.24)

第8表　叱責時に於ける両親の憤怒　(15,16)

比較群	父母別	激怒しない		激怒する		少々激怒する		無答		計
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
良群	父	24	22	52	47	31	28	4	14	111
	母	38	34	33	30	35	32	5	5	111
不良群	父	13	33	16	40	11	28	0	—	40
	母	14	35	15	38	11	25	1	3	40
男	父	13	18	34	48	22	31	2	3	71
	母	25	35	20	28	23	32	3	4	71
女	父	24	30	34	43	20	25	2	3	80
	母	27	34	28	35	23	29	3	4	80
計	父	37	25	68	45	42	27	4	3	151
	母	52	34	48	33	46	32	6	4	151
総計		89	29	116	38	88	29	10	3	302

① 父の場合　「怒る」「怒らない」の比較　CR=3.11　怒る>怒らない
② 父の場合　男女間の比較　$X^2=8.88$　$P<0.05$
③ 母の場合　環境別比較　$X^2=27.84$　$P<0.01$
④ 父母間の比較　$X^2=16.20$　$P<0.05$　「怒る」「怒らない」の比較　CR=2.54　母>父

また「叱る前に理由を言う」か否かに問しては、第9表の如くであり、父母間では母の方に理由をいわないものが多い。

経済的に良群と不良群とを比較するときは父母の何れの場合でも、理由をいうものは良群に、いわないものは不良群に多くみられる。

第9表　叱る前にその理由をいう。　(18、19)

比較群	父母別	理由を言う		言わない		時々いう		無答		計
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
良群	父	43	39	60	54	1	1	7	6	111
	母	28	25	76	68	1	1	6	5	111
不良群	父	25	63	13	33	0	—	2	5	40
	母	19	48	20	50	0	—	1	3	40
男	父	28	39	37	52	1	1	5	7	71
	母	24	34	41	58	1	1	5	7	71
女	父	40	50	36	45	0	—	4	5	80
	母	23	29	55	69	0	—	2	3	80
小計	父	68	46	73	48	1	0.6	9	6	151
	母	47	31	96	64	1	0.6	7	5	151
総計		115	38	169	56	2	0.6	16	5	302

① 父の場合　環境別比較　$X^2=6.68$　$P<0.05$、「言う」について　CR=2.57　良>不良
「言わぬ」についてCR=2.33　不良>良

② 母の場合　「言う」「言わぬ」の比較　CR=4.31　言わぬ言う
環境別比較　$X^2=7.07$　$P>0.05$「言う」について　CR=2.61　良>不良
「言わぬ」についてCR=2.09　不良>良

③ 父母間の比較　$X^2=87.15$　$P<0.01$「言う」について　CR=2.40　父>母
「言わぬ」についてCR=2.66　母>父

C) 両親の叱責は子供の行動に効果をもつことは当然考えられる。子供は「命ぜられたことは必ずしなければならないか」（問17）に対しては肯定するもの89%、否定するもの10%であり（CR=16.05）大部分が親の命に従うべきことを答えているが、この従順の理由に於て叱責が大きな働きをしているのである。すなわち第10表は従順の理由の分布であるが、罰を避けるためとするものが、その他の理由よりも有意な差（CR=2.96）を以て多くなつているのである。

第10表　親の命に従う理由

理由	罰を避ける	親が忙しそうで気の毒	貰いこと良いこと	当然である	其他無答
%	40	18	6	2	33

同様に父母を恐れる理由の問に対する答に於ても、叱る、叩くなどの罰を挙げているものが最も多く、殊に父の場合顕著に認められる。（CR=2.27）

第11表　親を恐がるか否かの理由

理由	叱る 叩く	やさしい	金をくれる	自分は強い 其他	無答
父の場合 %	42	21	5	4	30
母の場合 %	30	30	6	6	29

経済的群別の結果によれば、母に対して罰を理由として恐れる子供は良群よりも不良群の方に多く見られる。(CR=2.85)

d)　叱られた後の幼児の感情に関する問13の結果は第12表の如くである。単なる恐怖或は悲哀感をもつ者が多い。自己を悪いとして反省するものは、経済的良群に比較的多くみられる。

第12表　叱られた後の幼児の感情

比較群＼感情		恐ろしい 悲しい		悪かつたと 反省		親も悪い		叱られる 理由なし		何とも思わぬ		叱られない		無答		計
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
環境別	良	38	34	31	28	2	2	1	2	16	15	3	3	20	18	111
	不良	21	53	6	15	1	3	0	—	4	10	0	—	8	20	40
性別	男	30	42	13	18	1	1	1	1	14	20	1	1	11	17	71
	女	29	36	24	30	2	3	0	—	6	8	2	3	17	24	80
計		59	39	37	25	3	2	1	0.6	20	13	3	2	28	20	151

①　環境別比較　X^2=10.64　P<0.01「恐しい悲しい」について　CR=2.04　不良>良

②　性別比較　「何とも思わぬ」　CR=2.20　男>女

e)　両親によつて与えられる罰を子供は如何に思うか、すなわち「子供の非行に対して親は如何にすればよいか」(問42)に関する幼児の答えは第13表の如くである。之によれば叱ればよいとするものが最も多い。

第13表　罰に対する幼児の意向

比較群＼罰の種類		叱る		叩く		諭す		何も言わぬ		怒つてはいけない		其他及無答		計
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
環境別	良群	56	51	8	7	17	15	1	1	4	3	25	22	111
	不良群	25	63	0	—	1	3	1	3	6	15	6	15	40
性別	男	35	51	5	7	4	6	1	2	7	10	19	26	71
	女	46	57	3	4	14	18	1	1	3	4	12	16	80
計		81	54	8	5	18	12	2	2	10	6	31	20	151

①　環境別比較　「喩す」について、CR=2.16　良群>不良群

②　性別比較　X^2=16.59　P<0.01「諭す」について　CR=2.25　女>男

また、性別による差があり、諭せばよいとするものは女子の方に多い。経済的環境別では諭せばよいとするものは良群の方に多い。

f)　問10及び11は子供が現実に与えられる罰の形式であり、問42は子供がいわば希望する罰の形式を問うものである。この両者を比較すれば第14表の如くとなる。之によれば、「叱る」ことに関しては差はみられないが、叩く、隔離するなどの罰形式は現実の方に多く見られている。叱られる

ことは当然としながら体罰への回避傾向が示されている。

第14表　現実の罰と子供の希望

罰の種類	叱る		叩く・隔離		注意		其他無答		計
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
父の現実の罰	61	40	58	39	4	3	28	18	151
母 〃	72	48	52	34	18	12	9	6	151
希望	81	54	8	5	18	12	44	29	151

① 現実と希望の比較　父の場合　$X^2=3.38$　$0.30<P<0.50$

「叱る」について　CR=2.31　希望>現実

「叩く」について　CR=7.25　現実>希望

② 〃　母の場合　$X^2=3.63$　$0.30>P>0.50$

「叩く」について　CR=8.69　現実>希望

g) 悪いことをしたとき、叱責が前からわかるか（問45、46）、に於ては第15表の如き結果である。

第15表　悪い事をした時叱られる事が前からわかる

(45. 46)

父母別	肯定	否定	CR
母	73%	23%	7.50
父	90%	25%	7.76

父母共に肯定されるものが多く、之は親への質問と大体符合する。また母の場合性別による差がみられ、この問を肯定するものは男子（63%）より女子（76%）の方に多い。（CR=4.78）

〔2〕親の保護監督に対する子供の態度

(a) 親が子供の手伝をしてくれるか（問22）に対する答は肯定75%、否定15%（CR=10.34）もつと手伝つて欲しいか（23、24）、は問23では肯定53%否定43%、問24では45%、52%であり有意な差は認められない。（之は Radke も略同様である）。

(b) 誰と遊んでも親は何もいわないか（問25）については、肯定76%、否定20%（CR=8.56）（之は Radke も述べているように幼児の生活環境が狭く友人選択の範囲に自ら限界があり親によくわかつた幼児の中から選ばれることに帰因するであろう）。

友人選択に関して拘束をうける理由としては第16表の如き結果が得られた。

第16表　友人選択拘束の理由

友人の非行	不潔	遠距離	年令の相違	未知の子供	第三者から叱られる
43%	10%	7%	10%	13%	3%

友人を家に連れてくるこるとき親は喜ぶか（問27）については、肯定41%、否定47%で有意の差はないが、友人選択の場合よりも制限が加わる様子がある。男女別では女子の方に喜ばれないものが多い（男子42%女子51%CR=3.49）。之は Radke の結果と逆である。

(c) 親は家の道具を汚さないように注意するか（問26）については肯定64%、否定27%（CR=5.83）で肯定するものが多い。之は Radke も同様である。

〔3〕親子間の親疎関係に関する子供の態度

(a)　親は自分（子供）を大切にしてくれるか（問6、7）については

母に対し　肯定　90%　否定　60%（CR=20.48）

父に対し　肯定　85%　否定　8%（CR=9.98）

子供がその考えを親に打明けるか（問28、29）

母の場合　肯定　82%　否定　16%（CR=10.84）

父の場合　肯定　74%　否定23%（CR=4.70）

であり Radke と同様な傾向を示している。

両親へ質問するか、親はそれに答えるか（問30、31）では

母への質問　肯定　82%　否定　15%（CR=11.64）

父への質問　肯定　74%　否定　20%（CR=3.59）

母の回答　肯定　81%　否定　5%（CR=17.68）

父の回答　肯定　74%　否定　5%（CR=15.27）

であり親に質問する幼児が多く、又回答する親も多い。性別では母への質問は男子（89%）の方が女子（76%）より多い。（$X^2=6.24$. $P<0.05$）

親子が一緒に遊ぶか（問36,37）では

父の場合　肯定　52%　否定　42%

母の場合　肯定　42%　否定　54%

であり、有意な差はないが、遊んでくれないのは父より母の方に多い。之は親への質問の結果と一致する。

(b)　家族の親以外の成員に比較して親がどの程度好かれ、又父母の何れがより好かれているかについては、家族の中で最も好きな人、嫌いな人への問（32, 33）によつて窺うことが出来る。この結果は第17表の如くである。

第17表　幼児によつて最も好まれる家族及嫌はれる家族（32, 33）

家族	父		母		兄		姉		弟		妹		祖父母		其の他		計
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
好きな人	48	32 (34)	56	37 (40)	6	4 (6)	4	3 (5)	5	3 (9)	6	4 (9)	8	5 (19)	18	12	151
嫌いな人	22	14 (15)	9	6 (7)	38	26 (38)	17	11 (21)	12	8 (21)	10	7 (15)	4	3 (9)	39	25	151

一人子18人　兄99人　姉80人　弟56人　妹64人　祖父母41人…括弧内の数字は　左の一人子　同胞、祖父母の総数にて実数を除した百分率。父と母の比較　嫌いな人について、　CR=2.24　父>母

最も好かれるのは母、次いで父であり両者が全体の69%を占める。最も嫌われるのは同胞であり兄が最も悪い。父母間の差は嫌われる場合は父の方が多い。

親によつて誰が最も好かれるか（34, 35）の結果は第18表の如くである。自己が最高に位置される傾向がある。

第18表　両親によつて最も好まれる家族　(34,35)

家族	自己		兄		弟		姉		妹		父		母		其の他		計
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
母によつて	45	30 (25)	14	9 (14)	16	10 (28)	12	8 (15)	22	15 (34)	20	13	—	—	22	14	151
父によつて	48	32 (34)	15	10 (15)	14	9 (25)	17	11 (21)	18	11 (28)	—	—	12	18	27	17	151

（括弧内の数字は第17表の場合と同じ）

〔4〕その他の子供の態度

(a)　親が罰の約束を履行するか（問43,44）では

父の場合　肯定　38%　否定　42%

母の場合　肯定　35%　否定　55%

母の方が罰の約束を実行しない場合が多い。

(b)　父母間の子供への態度の一致に関する質問（38.39）の結果は第19表の如くである。

第19表　両親の躾の一致の有無　(38.39)

グループ別		一致する		一致しない		其の他		無答		計
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
父	良環境	66	60	33	34	7	6	4	4	111
	不良環境	18	45	21	53	1	3	0	—	40
父 (38)		84	56	54	36	8	6	4	3	151
母 (39)		47	31	93	62	5	3	6	4	151

① 父の場合　CR=2.00　一致>不一致

環境別比較　X^2=7.71　P<0.05　「不一致」について　CR=2.57　不良>良

② 母の場合　CR=4.09　不一致>一致

③ 父母間の比較　X^2=15.96　P<0.01.　「一致」について　CR=4.29　父>母

「不一致」についてCR=4.49　母>父

問38は父に対する母の同意の、問39はその逆の意味をもつている。前者に於ては不一致より一致するものが多く、後者では一致より不一致の方が多い。したがつて母は父の態度に同意追随する傾向が強く、父は必しも同意するとはいえないことになる。

経済的環境別に見れば、父を主とする場合、一致しないものは良群より不良群の方に多く、不良群では母が父に追随する程度が少ないことを示している。

(c)　幼児が両親によつて要求を疎止された場合、如何なる方法によるのが目的達成に最も効果的としているか（問47.48）に関する答の結果は第20表に示す如くである。

第20表　幼児の要求実現の方法　(47, 48)

方法 / グループ		a 無視				b 啼泣				c 反抗				d 訴願				総数
		成功		失敗		成功		失敗		成功		失敗		成功		失敗		
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	
男	父	8	11	57	80	9	12	50	70	12	17	52	73	30	42	35	50	71
	母	10	14	56	79	12	17	46	64	15	21	50	70	48	67	18	25	71
女	父	7	9	69	86	20	25	51	63	10	12	61	76	40	50	37	52	80
	母	9	11	65	81	14	17	56	70	11	13	62	77	51	63	23	29	80
父		15	10	126	83	29	19	101	69	22	1	113	74	70	46	72	47	151
母		19	13	121	80	26	17	102	69	26	17	112	74	99	6	41	27	151

① 成功、失敗の比較

母の場合、a…CR=12.09　b…CR=8.02、c…CR=9.54、にて全て失敗>成功、d…CR=5.35にて成功>失敗

父の場合、a…CR=14.41、b…CR=7.37、c…CR=10.16、にて全て失敗>成功　d…CR=0.16

② 性別比較

父においてbの場合X^2=39.32　P<0.01「成功」についてCR=2.41　女>男

③ 父母間の比較

dについて　X^2=9.40　P<0.01「成功」につき　CR=2.21　母>父

「失敗」につき　CR=3.68　父>母

母に対しては成功率の最も高いのは訴願によるものであり、無視、啼泣、反抗の方法は失敗するものが多い。父に対しては四方法の何れもが成功するとはいえない。父母間に於てこの方法に関して有意な差の認められるのは訴願による場合のみである。性別比較に於ては、父に対して啼泣して訴える方法は女子の場合男子よりも成功率が高い。

(d)　幼児は親の行動を嫌うか、嫌うとすれば如何なる行動か（問50, 51）に関する質問の結果は第21表の如くである。

第21表　子供の嫌う両親の行動の有無とその種類　(50, 51)

区別	無	有	其他	罰	遊びの妨害	父母の喧嘩	用事をさせる	その他
父	65	28	7	37	11	2	11	8
母	70	25	5	36	12	3	10	15

父母の行動を嫌う子供は少ないが、嫌いな行動としては罰に関するそれが最も多く指摘せられている。ここにも罰に対する子供の態度が現われているわけである。

(e)　親が子供自身への希望を子供自身は如何に受取るかを問52. 53は答えさせるものであるがその結果は第22表の通り、

第22表　両親の希望の有無と内容　(52. 53)

有無と内容 ＼ 父母別		希望の有無				希望の内容					
		有	無	無答	計	賢い子	良い子	可愛い子	お手伝する子	他人のような子	不明
母の場合	実数	89	17	45	151	40	22	5	5	17	0
	%	59	11	30	100	45	24	5	5	19	0
父の場合	実数	83	16	52	151	37	15	3	0	20	8
	%	55	11	34	100	44	18	4	0	24	10

半数以上が父母の希望、鞭撻を感じているが、その内容としては知的優秀に関するものが最も多い。しかし幼児の概念内容から、賢い子と良い子との区別は明らかとも思われない。

(C) 親子間の態度の比較（副目的3）

以上で明らかな如く、親と子のそれぞれに対して行つた質問の項目には、全く同一内容をもつものがかなり含まれている。この質問に対する答を比較することにより、両者の態度の同一又は相違を知ることが出来よう。之は序論で触れた如く、親の態度が子供に如何に受取られるかに関する処であり、例えば Cass が Identification. Awareness. 等の用語を操作的に定義せんとした時と同じ問題に属する。（註 (8) P. 2）

10個の質問項目について82家庭の父母、及びその子供（幼児）を対象として答を比較したが、その結果は第23表に示す如くである。なお10項目中前半は幼児の行動を中心に、後半は親のそれを中心としたものであり、父母の応答は積極的（肯定的）と消極的(否定)的に二分し、この夫々に幼児の積極、消極の応答を対応させた。

第23表　親子間の反応の比較

a　積極的反応に対する親子間の比較
b　積極的に反応する親子間の一致しないものの比較

質問項目	幼児の反応	母の反応					父の反応				
		積極的	消極的	計	X^2 P aCR.	X^2 P bCR.	積極的	消極的	計	X^2 P aCR.	X^2 P bCR.
子供は両親を恐がつている	積極的	8	28	36	1.38		25	17	42	2.21	
	消極的	11	34	45	0.1<P<0.8		17	20	37	0.5<P<0.7	
	計	19	62	81	3.12	2.84	42	37	79	0.65	0.00
両親から叱られることがその前からわかる	積極的	41	18	59	3.24		44	13	57	4.29	
	消極的	16	2	18	0.3<P<0.5		14	3	17	0.2<P<0.3	
	計	57	20	77	0.17	0.26	58	16	74	0.00	0.27
両親によく質問する	積極的	66	1	67	1.03		55	0	55	8.75	
	消極的	13	0	13	0.5<P<0.7		14	2	16	0.02<P<0.05	
	計	79	1	80	3.36	3.49	69	2	71	3.67	4.14
両親にいろいろ打あける	積極的	65	3	68	0.47		52	6	58	0.30	
	消極的	11	1	12	0.7<P<0.8		22	0	22	0.95<P0.98	
	計	76	4	80	2.27	2.16	74	6	80	3.46	3.16

両親の言うことをよく聞く	積極的	66	4	70	0.82		67	4	71	3.88	
	消極的	10	0	10	0.5<P<0.7		10	0	10	0.1<P<0.2	
	計	76	4	80	1.68	1.74	77	4	81	1.90	1.55
子供を叱る前にそのわけを言う	積極的	22	5	27	3.36		34	6	40	5.79	
	消極的	46	3	49	0.3<P<0.5		32	0	32	0.1<P<0.2	
	計	68	8	76	6.61	9.55	66	6	72	4.63	4.89
子供に愛情を示す	積極的	67	2	69	5.96		64	1	65	2.77	
	消極的	7	1	8	0.1<P<0.2		9	1	10	0.2<P<0.3	
	計	74	3	77	1.05	1.54	73	2	75	2.40	3.96
子供と一緒に遊ぶ	積極的	32	3	35	1.79		47	1	48	16.08	
	消極的	41	5	46	0.3<P<0.5		34	1	32	P<0.01	
	計	73	8	81	6.61	6.72	78	2	80	6.27	7.37
両親は子供が友達を家の中につれてくることを喜ぶ	積極的	39	0	39	2.89		29	3	32	2.14	
	消極的	37	5	42	0.3<P<0.5		37	8	45	0.5<P<0.7	
	計	76	5	81	6.81	6.90	66	11	77	5.37	5.05
子供の質問によく答える	積極的	62	5	67	1.71		57	5	62	1.30	
	消極的	3	1	4	0.5<P<0.7		4	1	5	0.5<P<0.7	
	計	65	6	71	1.05	0.76	61	6	67	0.34	0.22

第23表より、親子両者の態度に有意の関連性をもつ行動項目は「親によく質問する」、「子供と一緒に遊ぶ」の二つにすぎず、何れも父子の間の関連である。他の8項目については全て両者の反応に有意の関連があるとはいえない。したがつて一つの行動（親の行動にせよ、子の行動にせよ）に関する態度は親子両者にとつて必しも同様とはいえないことが多いということになろう。むしろ食い違う力が多いといえる。

次に10項目について親子が積極的応答を行つた比率を検定すれば、父母夫々6項目に於て有意な差が見出された。その内容に関しては例えば「子供は母を恐がつている」という如き望ましくない親子関係のあり方を現わす質問については、親よりも子供の方に明らかに肯定的反応が多く、之と反対に望ましい親子関係のあり方と考えられる質問については、親の方により多くの肯定的反応が見られるのである。この結果は親子間の態度の食い違いの方向を示すものといえよう。

概して親の愛情ある態度は幼児にとつて過小視せられ、憎しみの態度は過大視せられる傾向があり、この傾向は Radke の結果も同様に示しているところである。

以上の要約

(1) 親の態度が幼児に如何に受取られるかを面接質問によつて調べた。

(2) 罰の主体は父母が多く、父母に役割上の差は認められない。厳しい叱り方は父に多い。子供にとつては罰が必しも十分な自責的効果をもたない。子供は厳しい罰を回避したがる。

(3) 友人の選択には一般に拘束をうけないが、行動が家庭内に近づくにつれ（たとえば家庭経済に

影響するような行動になるにつれ）、拘束は強くなるようである。

(4) 親子間の親密関係は良好である。

(5) 子供の要求実現の手段で最も有效と考えられるのは訴願のそれである。

(6) 躾をうけるものは、与えるものよりも、躾の態度に関してより望ましくない方向の評価をする。

(7) 以上の傾向は Radke のそれと大体に於て一致する。

（D）親の子供にに対する態度と子供の行動特性との関係について（主目的）

結果整理のための手続

(1) 以上に於て親の子供への態度が調査されたが、その中、権威関係、拘束関係、罰、親疎関係の四範疇のみを取り出し、この範疇に該当する質問に関する応答を、その強度或は頻度に応じて、夫々3．2．1．0の得点を与え、各範疇毎の合計点を求め、之を以て親の当該範疇に於ける態度得点とする。

(2) この夫々の範疇毎に各々の親の態度得点に応じた頻数分布表を作り、その算術平均を中心として上下、1σを基準とし、＋1σ以上、－1σ 以下の得点の親を選抜し、この夫々の親に属する子供の行動特性を比較する。

(3) 子供の行動特性は担任教師の行動評価による。評価は別表Cの行動評価表（Radkeに依る）に基き、5段階に品等する。

(4) 幼児82名について得た結果に基き、各行動特性毎に5段階に応ずるT得点を算出する。(2) にのべた両親の二群（＋1σ以上群と－1σ以下群）の幼児の行動比較はこのT得点によつて行う。なお、之より先に母集団の分散の差につき検討した。

(5) 両親の二群は父、母別個に選抜する。但し父を選ぶ場合、その母（妻に当る）は少くとも父と相反する傾向を示さないものに限る。母を選ぶ場合も同じ。之は之によつて父母という人格結合体に於て態度特性の相殺される可能性を考慮したためである。

結果　差の有意水準10％以上の行動特性のみを掲げる。第24表がそれである。

(1) 権威の関係　すなわち子供への民主的な態度傾向の著しい親をもつ幼児と、専制的なそれをもつ幼児とを比較すれば、民主的な父をもつ子供は専制的な父をもつ子供に比して、他人に親切、同情的、周囲の事物に敏感に反応する、多くの興味をもつことが明らかとなつた。また有意な差はないがおてんば、やんちやの傾向もみられる。

第24表　親の態度と子供の行動特性との関係

子供の行動特性	親の態度による区別		平均T得点	t	有意水準
他人に親切同情思い遣り深い 〜他人に思い遣りがなく全く同情せず利己的	父——子 権威関係	専制群	47.75	2.85	0.01＜P＜0.025
		民主群	58.70		
周囲のことに敏感、常に興味をもつ 〜周囲のことに全く無関心、ぼんやりしてる	父——子 権威関係	専制群	49.29	2.18	0.025＜P＜0.05
		民主群	58.52		
全く大人つぽい、ませている、大人の風をしたがる 〜おてんば、やんちや	父——子 権威関係	専制群	44.46	2.03	0.05＜P＜0.10
		民主群	51.62		

他の子供と折合悪く常に喧嘩言合をする ～他の子供と折合よく喧嘩しない	母――子 権威関係	専制群 民主群	43.70 49.76	2.09	0.025<P<0.05
他の子供から攻撃される時常に自己を防禦する ～全く防禦出来ない	母――子 権威関係	専制群 民主群	54.48 45.56	2.33	0.025<P<0.05
他の子供達に非常に人気がある ～全く他の子供達に人気がない	父――子 罰の関係	厳格群 寛大群	53.86 46.69	1.76	0.05<P<0.1
他の子供達に非常に人気がある ～全く他の子供達に人気がない	母――子 罰の関係	厳格群 寛大群	52.02 40.85	1.82	0.05<P<0.10
他の子供達に非常に人気がある ～全く他の子供達に人気がない	両親―子 罰の関係	厳格群 寛大群	55.36 42.25	2.40	0.025<P<0.05
気分変り易い、直ぐ泣いたりかんしやくを起す ～気分を動かさず安定的、落着いている	父――子 拘束関係	拘束群 自由群	52.80 42.72	2.54	0.025<P<0·05
他の子供に影響がない、全く従属的地位に立つ ～他の子に強く働きかける、指導的地位に立つ	母――子 拘束関係	拘束群 自由群	48.48 42.31	1.93	0.05<P<0.10
他人に頼り、援助、指導を求め、賞められたがる ～大人より独立的、自分のことは自分でする	母――子 親疎関係	不良群 良　群	54.06 44.50	2.35	0.025<P<0.05
気分が変り易い、直ぐ泣いたり、かんしやくを起す ～気分が安定的	母――子 親疎関係	不良群 良　群	53.96 45.15	2.04	0.05<P<0.10

母の場合、専制群は民主群よりも、他の子供との折合がよい、喧嘩言いわけをしない、他の子供の攻撃に対し常に防禦的などの傾向が強い。之等は Radke の結果とかなり食い違うが、Baldwin の所説とはかなりよく一致する。(22)

(2) 罰の関係において、親の厳しい態度の群と、やさしい群とを比較するならば、父母別個の場合には有意な差を示す行動特性は見られないが、父母共に同じ態度をもつときには、厳格群の子供の方が友人間に人気がある特性を示した。之は Radke とは逆である。

(3) 拘束関係において、拘束力の弱い父をもつ群は、強いそれに比して、気分が安定的という特性を多くもつことが示される。

有意な差は見られなかつたが、拘束力弱く子供の自由を尊重する母をもつ群では、他の子供達に強く指導的地位に立つという特性が見られた。

(4) 親疎関係において、親密な母子関係をもつ子供の群は、疎遠な群に比して、独立的、気分が安定的などの行動特性をもつ。之は Radke とは一致しないがHattwick の研究結果とは一致する。(23)

(22) Balidwin. (7)参照
Baldwin は家庭に於ける民主的雰囲気は子供の行動を攻撃的、計画的、指導的にし、好奇心を増し、恐怖心を除き、不従順にする傾向があると述べている。

(23) Hattwick, B.W. ; The Relation of Parental Overattentiveness to Children's Work Habit and Social Adjustments in Kindergarten and the First Six Grade of School. *J. Educ. Research.* 30. 1936.
Hattwick は両親と子供との遊びが、子供の安定感、独立心に貢献するという。

以 上 の 要 約

(1) 親の子供への態度と、子供の特性との関係を明らかにせんとする。

(2) 親の態度は権威、拘束、罰、親疎の四関係において、著しい態度を示すものを区別し、その子供の、教師の評価による行動特性を、それぞれの範疇について比較した。

(3) 権威、拘束、親疎の範疇に於ては、親の極端な態度と子供の行動特性との間に有意な関係のあることが見出された。罰の場合には有意な関係は見出されなかつた。

(4) 一般に親の望ましい態度は、子供の望ましい行動特性と積極的関係をもつようである。

(5) 整理方法が異なるためか、 Radke の結果とはかなりの程度で不一致が示された。(24)

第 1 部全体の要約

(1) 親子関係の心理学的研究の一部として面接質問により親の子供に対する態度、子供が親の態度の受けとり方、親の態度と親自身が幼時にうけたその親の態度との関係、親の態度と子供の行動特性との関係について研究した。

(2) 親の態度は父母、世代、家庭の経済状況、親の教育程度によつていくつかの相違がある。父は母よりも子供により恐れられ、母は父よりも子供に対して神経質である。両親は祖父母よりも自己を民主的と解してをり、高い経済層の親並びに教育程度の高い親は低いものより民主的である。

(3) 親の態度と、それに対する子供の認識との間にはいくつかの食い違いが存する。一般に子供は親の態度を望ましくない方向に評価する。

(4) 親の態度と子供の社会的行動特性との間には関係がある。一般的に望ましい親の態度は、望ましい子供の行動特性と関係があるようであるが、本研究ではこの間の因果性に全然触れていない。

(5) Radke の研究方法を殆んど踏襲したが、結果は相当に食い違つている。之は アメリカと日本といつた文化的相違に基くものか、われわれの対象が少数なるためか、見本が偏つたためか、全く不明である。

第 II 部

目　　的

(1) 親の子供に対する態度が、子供の行動特性と如何なる関係をもつかを明らかにしようとする。

(2) 併せて Amen と Temple の考案した投影法(1)が、子供の行動特性の評価に有効なるかを検討しようとする。

研究の手続及び方法

(1) 親の子供に対する態度の測定

第 I 部と同様に、Radke の用いた質問紙（附表A）の一部を使用し、母親に対して面接質問を行

(24) Radke は極端なる態度を示す親の選抜に当り、われわれのように±1σの両端をとることはしていない。平均よりの上、下でわけている。親の態度の4段階の何れに得点を与えるかは、かなり恣意的であるために、方法的にはわれわれの方が些かなりともすぐれているのではなかろうか。

(1) Amen, E.W .and Temple, R. : The Study of Anxiety Reactions in Young Children by means of Projectie Technique. *Genet. Psychol. Monog.* 1944, 30, 59—114.

う。すなわち、Radke は親子関係の範疇に関して次の六系別を認めている。Ⅰ、民主―専制系列　Ⅱ　子供に対する制限又は拘束の厳格―緩和系列　Ⅲ、親の叱責の厳重―寛大系列、Ⅲ、親子間の親密―疎遠系列、Ⅴ、子供の養育責任の母―父系列、Ⅵ　同胞間の調和―不調和系列である。この六系列はそれぞれ数個の生活事態に於ける彼等の反応の形式によつて操作的に決定せられる。すなわちこの反応の如何によつて親の子供への態度は六範疇に於て定義されるわけである。われわれは附表Aの諸質問中より、上の六系列に含まれるもののみを選び(2) この六系列に於ける親の態度を測定する。質問に対する応答は第Ⅰ部の如く、強度又は頻度の多少に応じて四階段に区別せられる。しかし第Ⅰ部に於いてはこの四段階に等間隔の重みをつけ、夫々3、2、1、0と得点を与えたが、この等間隔と措定することには問題があると考えられるために、之を改め各段階のもつ全体的頻度よりT Scoreを求め、それに基いて段階間の調整を行つた。したがつて各段階の得点は質問によつて異なるわけである。なお、各系列の得点は、かくて得られた所属質問の段階点の平均である。この平均点で以て各系列特性をあらわすことにする。(3)

(2)　子供の行動特性の測定

直接観察法と投影法とを用いる。

(a) 直接観察法、担当教師が行動観察に基き特定の評価を行う。評価の方法は Radke による。即ち、長さ10cm の直線の両端に相反する行動特性をおきこの直線の該当する個所に所定の子供のその行動特性を check　するのである。被験児童の数だけ直線は用意されているために、各児童間の相対的な評価は容易に行われるわけである。整理する場合 Radke は直線を12等分し、特性項目の各々につき検討しているが、われわれは之を適応性の測定として使用する考えをもつたために直線を6等分し、最も check　の印の出現の高い部分に3、順次2、1の点数を与えた。幼稚園又は保育所の特定の集団生活に於いて、最も通俗的に見られる行動特性を一応適応度の高いものと考えたわけである。したがつて、この総点の高いものが、より適応しているとされるわけである。(4)

(b) 投　影　法

Amen 及び Temple の両人による方法を用いる。之は12枚の画より成り、それぞれが子供の不安の場面を示している。子供の顔の部分は空白となつており、別に嬉しい顔、悲しい顔の二種の小片を用意し、被験児童をしてこの何れか一方を選び画面の空白をうめさせる。この際判定の規準は選ばれた顔の小片のみならず、選択や充塡の際の言語反応も考慮する。小片における「喜び」「悲しみ」の反応数が本人の特性を示すとされる。但し本研究ではこの検討も目的の一部分である。(5)

---

(2)　六系別に属する問題の番号。
第Ⅰ部参照（第5頁）

(3)　段階点の重みずけについては、
Havighurst R.J. and Java H. Adolescent and Personality. 1949.
Shoben E.J.; The Assessment of Parental Attitudes in Relation to Child Adjustment. *Genet. Psychol. Monog.* 39, 1949.

(4)　文化的、社会経済的に異つた集団に於ては、異つた特性が適応的と考えられる。適応概念は子供の場合殊に絶対的な規準をもつとは考え難いために、この様な方法を用いた。

(5)　Amen と Temple の投影法。（次頁へ）

被験者　本研究に対象とした家庭は3つの群よりなる。第一群は大阪市内の一中小商工地区の幼稚園児と、同地区の小学校一年生の家庭であり家庭数は53（A群とする）。第二群は大阪市内の一母子寮の8家庭（B群）。第三群は大阪市内の貧困地区として選ばれている地区の家庭であり48戸を無意選択したもの(C群)である。以上の家庭の母親と子供に調査並びに検査を実施する。被検児童数は、群別では、A男28名、女25名、B、男7名、女6名、C、男20名、女28名。学年別ではA、幼稚園児25名、1学年児童28名、B、保育所児13名、C、1学年12名、2学年7名、3学年8名、4学年11名、5学年8名、6学年2名

検査の日時と場所

昭和28年1月～3月

場所はそれぞれの幼稚園及び小学校。

結果　並びに考察

(A) 母親の子供に対する態度について。

面接質問によつて得られた結果を、A・B・Cの群別に処理し比較する。いうまでもなく、この群別は家庭の社会経済的状況による区別であるために、もし結果に差が認められれば一応社会的経済的要因を考えることが可能となる。

第1図より第6図までは各々の母親の態度系列によつて整理した結果である。図の横軸は各系列についての得点であり、縦軸は各得点を得た母親の数の百分率である。点線はA群、実線はB、C群である。BとCは同じ社会経済階層の家庭と考えられるため一括した。

(1) 民主—専制系列（第1図）A群の方がBC群よりも民主的傾向が強い。その差は X^2 検定により1％水準で有意である。

(2) 子供に対する親の制限の厳格—緩和系列（第2図）BC群の方がA群よりも、親の制限はきびしい傾向が窺われる。（$0.1<p<0.2$）

(3) 親の叱責の厳重—寛大系列、AよりBC群の方が叱責厳重の傾向がある。しかし有意な差は見られない。（$0.3<p<0.5$）

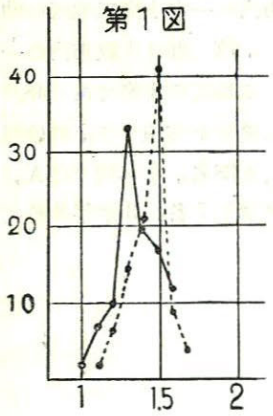
(4) 親子間の親密—疎遠系列、A群の方がBC群よりも親密である。（$0.02<p<0.05$）

（前頁よりつゞく）

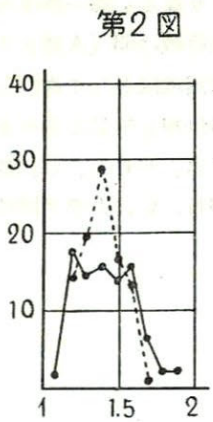
画面の大きさは 8.5inch×11inch。彩色画。場面は何れも4—6才の子供に親近感のあるものであり、内容は下の通り。

第Ⅰ画　子供が足にケガをして母親に治療をうけている。
第Ⅱ画　子供が2人ブランコに相乗りしている。
第Ⅲ画　2人の子供が玩具の取り合いをしている。
第Ⅳ画　子供が母親に叱られている。
第Ⅴ画　子供が独りで食事している。
第Ⅵ画　子供が他の2人の小さい子供と一緒に遊んでいる。
第Ⅶ画　子供が両親と別れて独りで寝床に行く。
第Ⅷ画　2人の子供が遊んでいて1人が離れて見ている。
第Ⅸ画　父親が赤ん坊を抱きあげているのを子供が見ている。
第Ⅹ画　子供がもう1人のより大きな子供に椅子でたたかれそうになつている。
第Ⅺ画　子供が他の2人のより大きな子供と一緒に遊んでいる。
第Ⅻ画　子供が両親にはさまれて歩いている。

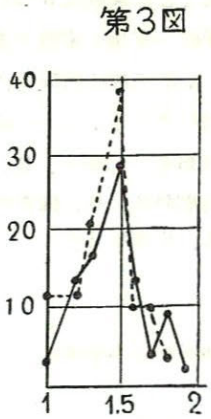
これらの画面を、それぞれの子供に番号順に提示する。提示の際、各画面についての誤解をさける為簡単な説明を与える。例えば第Ⅰ画には、〃あなたはこの子供が、どんな顔をしていると思いますか？うれしそうな顔ですか、悲しそうな顔ですか？。この子は傷をしています。この子供のお母さんが手当をしているのです。〃と云つた程度の説明である。各画面のその主題となる子供の顔は、空白になつていて、別に用意した子供の嬉しそうな顔と悲しそうな顔の2つの顔のいずれかを選ばせ、その空白に入れさせるのである。この場合、大抵の子供は、〃喜んでいます〃とか〃泣いています〃とかの言語反応と共に顔を置くが、何故嬉しそうかを説明させ記録しておく。それは、子供が、その画面事態に対して正しく知覚しているか否かを確める為と、顔の表情の選定に対する裏付けを得るためである。尚、被験者の性に合せて顔の小片を変える必要がある。



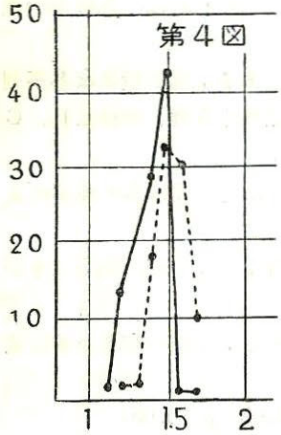
民主—専制



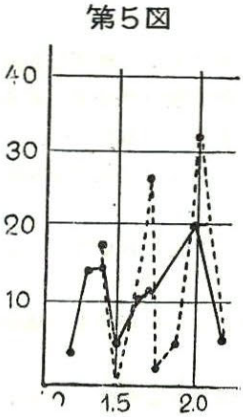
厳格—緩和



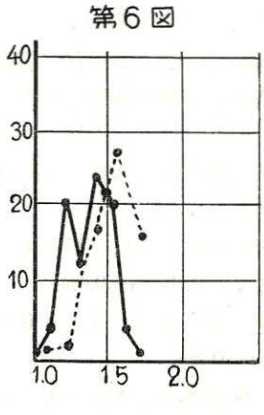
叱責の厳重—寛大



親子間　親密—疎遠



教育責任　母—父



同胞間　親密—疎遠

(5) 教育責任者が父—母系列。B群は母子寮であり、父親が亡いか、別居であるために、A群とC群とを比較した。A群の方がC群よりも、母に教育責任が多くかかる傾向があり、AC間の差は X^2 検定に於て1％水準で有意である。

(6) 同胞間の調和—不調和系列A群の方がBCよりも調和の傾向があるが、有意な差は見出されない。

以上は、貧困地区の家庭と、中小商工業地区の家庭とでは後者の方が前者よりも子供に対して親がより民主的、叱責が寛大、親子間の親密度が高い、母親が子供の養育に当るなどの点で、親の態度に於て或程度の差の存することを示している。之は更に分析すれば、経済的要因のみならず、教養の程度、文化的設備の程度等に分けられるかも知れない。しかし之等の要因分析に基づく研究は今後の課題である。(6)

(6) 之等の要因に関する考察は数多い。一、二を挙げれば、Harris は社会文化的な時代の変化が親の態度を変化する。民主的な自由な時代的変化が子供に対する同じ態度を生ずるという。
Harris, D.B. ; Social Change in the Beliefs of Adults concerning Parent-Child Relationships. Amer. Psychol. 1948, 3, 264.
Radke は第I部で述べたように親の態度が祖父母の世代よりも父母の世代の方が民主的な方向に向つているという。
個人心理的な立場では、Itkin は 1）親の態度は、その子供と共に経験した事によつて影響される。2）夫婦間の調和の程度が子供への態度に関係する。3）両親の幼時の家庭の雰囲気が重要。4）子供への態度は他人より学ぶ事がある。5）子供への態度は親の全人格の函数である、という。
Itkin, W.; Some Relationships between Intrafam ly Attitudes and Pre-parental Attitudes toward Children. *J. Genet. Psychol.* 1952, 80, 221—252.
なおまた、Levy は親の子供への過保護の要因として、1）待ちこがれた子供、2）夫婦間の性的不調和、3）母親の社会的活動の制限、4）母親の幼時の愛情不足、5）母親が幼時にその母親より与えられた極度の責任感、6）母親の希望の不達成、7）父親による効果のない躾、8）子供の不健康、を挙げる。Levy, D. M. ; Maternal Overprotection. New York 1943.

(B) 子供の行動特性の測定について

(1) Amen 法の吟味

Amen と Temple の投影法を用いたA群の結果は第1表の如くである。数字は何れも百分率であり、表中 Unhappy response とは悲しい顔を選んだ子供の率であり、Happy response は嬉しい顔を選んだ子供の率である。尚お括弧内の数字は Amen 等が25名の正常の子供について得られた結果であり、対照のために掲げた。

第　一　表

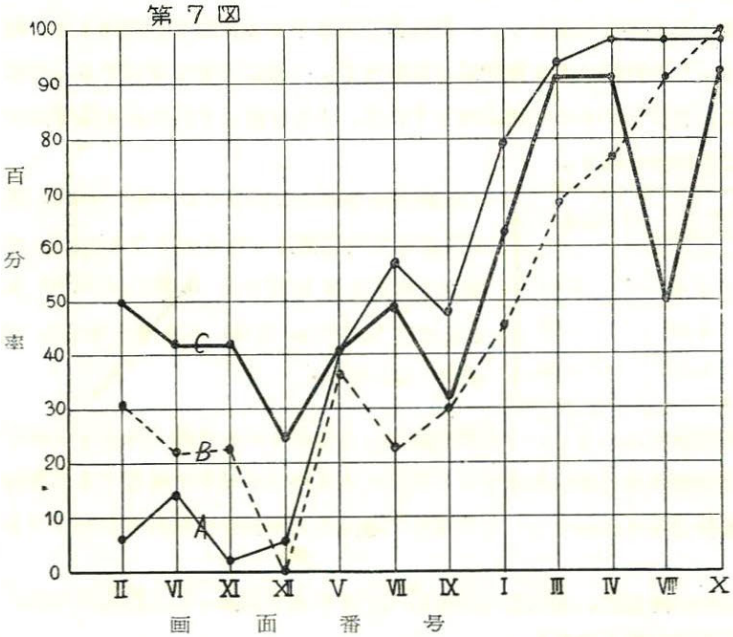
画の番号	Unhappy	response.	Happy	response.
II	5.8	(12)	94.2	(88)
VI	15.4	(28)	84.6	(72)
XI	1.9	(36)	98.1	(64)
XII	5.8	(20)	94.2	(80)
V	42.3	(27)	57.7	(73)
VII	57.7	(44)	42.3	(56)
IX	48.1	(32)	51.9	(68)
I	78.8	(68)	21.2	(32)
III	94.2	(64)	5.8	(36)
IV	98.1	(92)	1.9	(8)
VIII	98.1	(88)	1.9	(12)
X	98.1	(92)	1.9	(8)

Amen 等は結果の整理に当つて、II、VI、XI XIIの四枚の画を Happy picture, V VII IXの三枚を Equivocal picture、I III IV VIII X の五枚を Unhappy picture とし、正常児群に於いては大体この区別は妥当するといつているが、われわれの結果も同様であり、むしろ Amen 等以上に区別は際立つている。このような群化は正常児が社会的或は集団的活動を Happy と感じ、肉体的傷害とか、叱責とか、集団よりの除外を Unhappy と感ずる傾向のあることを示すものである。このことから Amen 等は、今被験児童の半数以上が happqy と反応した画面に unhappy と反応する児童があれば、その画面と類似の事態に於ける態度は好ましいものではなく、不適応行動となろうという。また equivocal の三枚に対して unhappy と反応するものは一般に unhappy の反応の多いものという傾向があるという。かくの如く Amen 等は unhappy response を重視し

$$\frac{\text{Unhappy response の画の数}}{\text{全反応数}} \times 100$$

の式より導出される得点を Anxiety score (不安点) とし、この不安点が子供の生活事態の不安程度を示すものとしている。すなわち人格の特性を不安の量で以て定めようとするわけである。第一表に現われた限り、われわれに於いても之を用いても良

第 7 図



いと思われる。

しかし Amen等の構想は数字の面から一応妥当とされるとしても、更に詳しく検討の要がある。この整理方法に於ては画面の性質は無視されるに近いといえる。というのは、画面に於て当然悲しい（unhappy）と反応されて然るべきものが多く含まれており、之が悲しいと反応されることは正常の反応であり人の不安を明らかにするとは考え難いわけである。この検討のために生活の不安がA群よりも多いと考えられるＢＣ群を対照群として、先ず各群の unhappy の反応を比較した。なお年令を一様に保つためにＣ群では小学校１学年児のみを用いた。第７図は各画面に対して示されたunhappy反応の百分率である。

また各群の不安点の平均は第二表の通りである。

第二表

A	54.1
B	46.1
C	55.5

之等によれば、各群の間に、不安に関して明らかな差があるとは認め難い。

次に equivocal な画に対して unhappy と反応したものについて、各群の百分率を比較すれば第三表の通りになる。

第三表

A	1.49
B	0.92
C	1.25

之に於いても各群の間に明らかな差は認め難い。

第７図より明らかなように、以上の結果は unhappy 反応を総計することにより生ずるように思われる。各画面に対しては相当に異つた反応を示すのであるが、之が総計されるとき相殺されて、群間の差が被われる如くであり、Anxiety score を手がかりとする限り　われわれの用いた群の差は明らかにされないのである。

この Amen 法を不安より一応切り離して、人格適応性の判断に用うるために、われわれは正常児より外れる傾向を考えることにした。

そのために、今、A群で70％以上が happy と反応している画面について unhappy と反応したもの、並びに70％以上が unhappy と反応する画面に対して happy と反応するものの平均の計を求めた。すなわち、画面の悲しみや不安ではなく、一般に喜び又は不安と反応する傾向よりの偏倚を手がかりとしたわけである。この偏倚の点を偏倚点と仮称する。一般に不安と反応するものに不安を反応し、喜びとするものに喜びとするのを適応性とすれば、上の手続より得られる偏倚点はいわば不適応点である。結果は第四表の通り。

第四表

	喜びに対する悲しみの反応	悲しみに対する喜びの反応	計（偏倚点）
A	0.28	0.26	0.54
B	0.77	1.15	1.92
C	1.59	1.08	2.66

この数字は各群の１人当りの平均である。計が各群の平均偏倚点となるわけである。この結果ではＡとＢの間では $0.05<p<0.10$, ＡとＣでは $0.02<p<0.05$ の水準で有意な差が認められる。

したがつて Amen 等が不安指数を求めるという本来の意向より外れるが、本検査法は上の如く利用することによつて、社会経済的状況の差に由来すると思われる人格上の差異を検査するに有用であると思われる。すなわち偏倚点を手がかりとして子供の不適応な人格特性を区別するわけである。

(2)　教師の行動観察による適応性の評価は、方法(2)(a)にのべたやり方で得点として得られたが、之を上述の偏倚点との関係は第五表の如くである。

第五表

	偏倚点をもつもの	偏倚点をもたないもの
A　群	2.351	2.538
B　群	1.780	1.880

数字は教師の評価点であるが、何れもAの方がBよりすぐれている。しかし偏倚点とは一定の関係は見出されない。この点は更に Amen 法又は教師の評価法について一層の吟味を要するところである。また偏倚点が如何なる不適応性を示すかの分析を要する点でもあろう。

（C）親の子供に対する態度と子供の行動特性との関係について。

以上、親の子供に対する態度と子供の行動特性とを別個に調べたが、両者の関係を求めるのが終局の目的である。ここでは子供の 行動特性として投影法（Amen-Temple法）より得られた結果と親の態度（質問による）との関係を検討する。

子供の行動特性として、偏倚点のあるものと、ないものとの群に分け、この夫々が、親の態度の六系列と如何なる関係にあるかを示すのが第六表である。

第　六　表

	偏倚点あるもの													偏倚点ないもの												
T secore	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2
民主的—専制的系列	1	2	2	10	9	6	6	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3	8	16	2	1	0	0	0	0	0
厳格—緩和系列	0	0	8	7	8	5	4	3	0	0	0	0	0	0	0	1	7	9	9	5	1	0	0	0	0	0
叱責厳重—寛大系列	2	0	6	6	0	4	7	3	2	0	2	0	0	0	0	1	6	0	19	2	3	2	0	0	0	0
同胞親密—疎遠系列	2	2	2	5	3	11	5	3	0	0	0	0	0	0	0	1	5	4	6	8	5	0	0	0	0	0
親子親密—疎遠系列	0	0	0	6	7	9	12	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	11	8	4	0	0	0	0	0
責任母—父系列	0	0	1	1	6	2	1	4	3	2	8	0	1	1	0	0	0	5	0	0	10	0	1	8	0	2

(1) 偏倚点をもつものは、もたないものよりも民主—専制系列において低い値を示しており両群の民主的雰囲気の差はX^2検定により、$0.05<p<0.02$で有意である。

(2) 躾の厳格—緩和系列、偏倚点のないものの方が緩和の傾向を示す。（$0.2<p<0.1$）

(3) 叱責の厳重—寛大系列、寛大な家庭の方が偏倚点をつものが少ないといつた傾向がうかがわれる。（$0.2<p<0.1$）

(4) 同胞間の親密—疎遠系列、偏倚点をもつ子供は親密な方に少ない。（$0.3<p<0.2$）

(5) 親子間の親密—疎遠系列、偏倚点をもつ子供は親密な方に少ない。（$0.5<p<0.7$）

(6) 教育責任者母—父系例、B群が母子寮の子供であるために条件が一様でないから不明である。

要　　約

(1) 親の子供に対する態度と、子供の行動特性との関係を知ろうとした。

(2) 親の態度測定の方法は第Ⅰ部と大体同様であるが、子供の行動特性の測定に当つてはAmen と Temple の考案した投影法を用い、同法の検討を併せて行つた。

(3) 親の子供への態度は、家庭の社会経済的状況によつて差が見られた。良き階層程民主的である。

(4) 子供の行動特性の測定に於て Amen-Temple法が有効なることが示された。

(5) 親の態度と子供の行動特性との関係の点では、殊に民主的雰囲気が子供の適応性に有効に働くことが暗示せられた。

附記　本研究は文部省科学奨励金による。

SUMMARY

The Psychological Study of the Parent - Child Relationship

Prof. Noboru Nakanishi
Lect. Katsuichiro Konishi
Assist. Kayoko Tani

Part 1

(1) As a part of the psychological study of parent-child relationships, we studied the attitudes of parents to their children and of children to their parents, the differences between the attitudes of present parents to their children and those of their parents to them in their childhood and the relations of parental attitudes to children's behavior traits, by interview and questionnaire methods. (according to Radke's study)

(2) As for the parental attitudes, we found followings: fathers were feared more than mothers, and mothers were more nervous than fathers in the caring. Parents responded that they disciplined their children more democratically than grandparents. Parents in good economic status and high educated were more democratic than those in poor and low educated.

(3) There were some differences between the recognition of parents and children about parent-child relationships. In general, children estimated parental attitudes more badly than parents themselves.

(4) We found some relations between parental attitudes and children's social behavior traits. It seemed that the desirable attitudes of parents were associated with the desirable behavior traits of children.

(5) Comparing with the Radke's results, we found the considerable differences between our study and hers. But it is not clear, if they be due to the cultural differences between in Japan and in U.S.A., a small number of our subjects, or deviated sampling.

Part 11

(1) The relationship between the parents' attitudes to their child and child's behavior was investigated by means of following methods.

(2) For measuring parents' attitudes, the questionnaire method, as in the first part, was used but child's behavior was investigated by means of the projective method, that Amen and Temple had investigated. In addition, that projective method was criticized.

(3) According to social economic condition in the home, significant differences were found among parents' attitudes to their child. The better economic condition in a home, the more democratic home atmosphere was found.

(4) It was shown that the Amen-Temple Method could effectually be used to evaluate child's behavior.

(5) As for the relationship between parents' attitudes and child's behavior, it was suggested that the democratic atmosphere in a home was especially effective to child's adjustment.

附表 A

両親に對する質問

この調査は、あなた自身が子供の頃、受けた訓育の状態についておたずねするものです。あなたの受けられた経験に最もよくあてはまる括弧の中の項目に○印をつけて下さい。

1．私の両親は私が家へ遊び友達を連れてくることを喜びました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
2．私の両親は私をどんな子供とも遊ばせました。（いつも、時々、稀に、全くない）
3．子供の頃私は家庭の計画や相談事に加わりました。（いつも、時々、稀に、全くない）
4．私は父親と一緒に考えたり、心配したり、希望したりしました。（いつも、時々、稀に、全くない）
5．子供の頃、母親から叱られました。（いつも、時々、稀に、全くない）
6．私の両親は、何時も家の中を整頓するように云いました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
7．父親の訓戒は、きびしいでした。（いつも、時々、稀に、決してない）
8．私の両親は、子供は監視してやるべきものと考えていた。（いつも、時々、稀に、決してない）
9．私は母親のいう事をききました。（いつも、時々、稀に、全くない）
10．母親のいい付けを聞かない時、母親は私に無理にでもさせました。（いつも、時々、稀に、全くない）
11．私の両親は私を叱る時、たたきました。（いつも、時々、稀に、全くない）
12．私の両親は小言で私を叱りました。（いつも、時々、稀に、全くない）
13．私の両親は私を罰する時(押入、土蔵、自分の部屋等へ)閉じこめました。（いつも、時々、稀に、全くない）
14．私の両親は私を罰する時、私の好きな物や特権を取上げました。（いつも、時々、稀に、全くない）
15．私の両親は侮辱的な言葉で私を叱りました。（お前はバカだ等）（いつも、時々、稀に、全くない）
16．私の両親はお行儀よくしたらお菓子をあげるという様な買収的方法を使いました。（いつも、時々、稀に、全くない）
17．私の両親は私が間違いを犯した時、その当然の結果をうける様にしむけました。（いつも、時々、稀に、全くない）
18．私の両親は私が我儘をしたら、もう可愛がらないよといつて私を叱りました。（いつも、時々、稀に、全くない）
19．私の両親は私を罰する時、ひどく脅かしました。（罰があたる、巡査のところへつれてゆく等）（いつも、時々、稀に、全くない）
20．私は母親と一緒に考えたり心配したり希望したりしました。（いつも、時々、稀に、全くない）
21．子供の頃、父親から叱られました。（いつも、時々、稀に、全くない）
22．母親の訓戒はきびしいでした。（いつも、時々、稀に、全くない）
23．私は父親のいう事をききました。（いつも、時々、稀に、全くない）
24．私が父親のいいつけをきかぬ時、彼は無理でもそれをさせました。（いつも、時々、稀に、全くない）
25．子供の頃、母親は私にやさしかつた。（いつも、時々、稀に、全くない）
26．子供の頃、私は兄弟姉妹と喧嘩しました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
27．私は子供の頃、兄弟姉妹を嫉みました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
28．子供の頃、私の兄弟姉妹は私を嫉みました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
29．私の両親は兄弟姉妹よりも私を可愛がりました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
30．私の両親は私よりも兄弟姉妹の方を可愛がりました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
31．私の両親は子供の希望や興味を中心とした家庭を作りました。（非常に、幾分、殆どない、全くない）
32．子供の頃、父親は私にやさしいでした。（いつも、時々、稀に、決してない）

33. 私の思う様にならなかつた時、私は泣き叫び、かんしやくを起しました。
(いつも、時々、稀に、　決してない)
34. 私の思う様にならなかつた時、私はすねたり、不機嫌、強情になりました。
(いつも、時々、稀に、　決してない)
35. 私の思う様にならなかつた時、私は結局親の言う事をききました。(いつも、時々、稀に、　決してない)
36. 私の思う様にならなかつた時、私は頼んだり甘えたりしました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
37. 私の思い通りにならなかつた時、私は理屈をこねて談判しました。(いつも、時々、稀に、　全くない)
38. 私は両親の言いつけを無視して私の思い通りにしました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
39. 母親の叱り方は、やさしいでした。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
40. 父親は私が人より勝れる様に、べんたつしました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
41. 子供の頃、私は父親が好きでした。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
42. 私の母親は子供の頃、私を赤ん坊扱いしました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
43. 私の両親は私を監督しました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
44. 子供の間、私は母親を恐いと思いました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
45. 私の父親は私の質問に根気よく答えてくれました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
46. 子供の頃、私は父親から好かれていないと思いました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
47. こんな事をしたら母親から罰せられると前から分かつていました。(いつも、時々、稀に、　全くない)
48. 子供の頃、私は母親が好きでした。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
49. 父親は、私をきびしく叱りました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
50. 子供の頃、私は自分の思い通りにしました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
51. 私の両親は私に絶対に言う事をきく様に期待しました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
52. 私は親から叱られる時、腹を立てました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
53. 私の母親は子供の頃、私を愛するそぶりをみせました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
54. 私の両親は私の質問に応じず、ほつておいた。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
55. 子供の頃、父親は私と一緒に遊びました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
56. 子供の頃、私は父親が恐いと思いました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
57. どんな事をしたら父親から罰せられるか前から分かつていました。(いつも、時々、稀に、　全くない)
58. 子供の頃、私は父親より母親の方が好きでした。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
59. 母親は、私を人より勝れるように、べんたつしました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
60. 父親は私を罰するとき怒りを顔かたちに現しました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
61. 私の両親は私を罰する時、意見が一致しました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
62. 子供の頃、私は母親から好かれていないと思いました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
63. 私の父親は子供の頃、私を愛するそぶりをみせました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
64. 母親は私をきびしく叱りました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
65. 私の両親は私を叱る時、その理由を説明しました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
66. 子供の頃、私は母親よりも父親の方が好きでした。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)
67. 父親の叱り方はやさしいでした。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
68. 母親は私を叱るとき、怒りを外に顔かたちに現しました。　(いつも、時々、稀に、　全くない)
69. 私の父親は子供の頃、私を赤ん坊扱いしました。　(非常に、幾分、殆どない、全くない)

70. 子供の頃、母親は私と一緒に遊びました。　（いつも、時々、稀に、　全く無い）

次の各々は貴方のお子達に対する訓育についてお聞きするものです、一番よくあてはまると思われる項に○をつけて下さい。

71. 私は子供とあそびます。　（非常によく、幾分、殆どない、　皆　無）
72. 私の子供は扱い易いです。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
73. 私の子供は私に質問します。　（非常によく、幾分、殆どない、　皆　無）
74. 子供に対して私は厳格です。　（いつでも、時々、稀に、　少しもない）
75. 私は子供は監視すべきで言う事をきくべきでないと思います。
（いつでも、時々、稀に、　少しもない）
76. 子供が私のいう事をきかない時、私は子供に負けます。　（いつでも、時々、稀に、　少しもない）
77. 私は子供が遊び友達を家へ連れてくる事を好みます。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
78. 子供に与える教育はきびしいです。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
79. 子供は家庭の相談事に加わります。（発言権をもつています）（いつでも、時々、稀に、　全くない）
80. この子供は兄弟姉妹より扱い難いです。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
81. この子供は兄弟姉妹の間で人気があります。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
82. この子供は兄弟姉妹と喧嘩します。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
83. （家庭内の）他の子供はこの子供を嫉いています。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
84. この子供は（家庭内の）他の子供を嫉いています。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
85. この子供は父親を好きな風をみせます。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
86. 私は忙しいのでこの子供の質問に答えられません。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
87. 子供に何をしたら叱られるかどうか前以つて知つています。（いつでも、時々、稀に、　全くない）
88. 叱るときに父親が当ります。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
89. 私は子供を叱る時、たたきます。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
90. 私は子供を叱る時（押入、土蔵、部屋などへ）とじこめます。
（いつでも、時々、稀に、　全くない）
91. 私は子供を叱る時、子供の楽しみや特権をとりあげます。（いつでも、時々、稀に、　全くない）
92. 私は他人の前で子供を叱つて恥をかかせます。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
93. 私は子供がよく云い付けを聞いたら御褒美をやります。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
94. 私は子供が悪い事をしたらその当然の報いをうけるようにしていましめます。
（いつでも、時々、稀に、　全くない）
95. 私は悪い事をしたらもう父も母もあなたをかわいがらないといつていましめます。
（いつでも、時々、稀に、　全くない）
96. 私の子供は私のいうことをききます。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
97. 私は子供を叱る時、おだやかにします。　（いつでも、時々、稀に、　全くない）
98. 私は子供に能力をせい一ぱい働かせ、人より勝れるようにべんたつしています。
（いつでも、時々、稀に、　全くない）
99. 私の子供のそぶりは母親を好いています。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
100. 私の家庭は子供の慾望や興味を中心としています。（子供本位です）
（非常に、幾分、殆どない、　全くない）
101. 私は私の子供をかんとくします。　（非常に、幾分、殆どない、　全くない）

102. 私の子供を叱るのは母親が当ります。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

103. 子供が言う事をきかぬとき神仏の罰があたるとか、巡査につれていつてもらうなどでおどかします。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

104. 私の子供は思い通りにならぬとき、(ジタバタせず) あきらめて私のいう事をききます。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

105. 私の子供は思い通りにならぬとき、泣きわめき、又はかんしやくを起します。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

106. 私の子供は思い通りにならぬとき、すねたり、不きげん、強情になります。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

107. 私の子供は思い通りにならぬとき、私に談判をして理屈をいいます。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

108. 私の子供は私の言うことなどきかないで思い通りのことをします。
(いつでも、時々、稀に、　全くない)

109. 私の子供は母親を恐れています。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

110. 私は子供については全く呑気です。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

111. 私は子供の質問に気楽に根気よく答えます。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

112. 私は子供を好きなようにさせます。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

113. 私の子供は私が叱ると怒ります。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

114. 私の子供は身綺麗にするように云われています。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

115. 私の子供は父親を恐れています。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

116. 私は子供が無条件に言う事をきくように望みます。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

117. 私は子供を叱る前にその理由を言います。　(いつでも、時々、稀に、　全くない)

118. 私は子供に愛情を示します。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

119. 私の子供は自分の考えたことや、感じたことを私に打ち明けます。
(いつでも、時々、殆どない、　全くない)

120. 私は子供を赤ん坊扱いします。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

121. 私は反抗的な子供より従順な子供の方が好きです。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

122. 私は大人に好かれる子供より子供達に人気のある子供の方が好きです。
(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

123. 私は独立的なませた子供よりも可愛いい赤ちやんらしい子供の方が好きです。
(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

124. 私はおてんばかゴンタよりも上品なおませさんの方が好きです。
(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

125. 私はおしやべりさんよりも静かな子供の方が好きです。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

126. 私は小心な用心深い子供よりも、大胆な図太い子供の方が好きです。
(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

127. 私は自分の子供の行いに満足しています。　(非常に、幾分、殆どない、　全くない)

附記 (1) あなたが子供時代にうけた訓育の方法と自分の子供に行つている訓育方法との相違を簡単にかいて下さい。

(2) その理由をかいて下さい。（何故違うとお考えになりますか。）

附表 B　　子供に対する質問

1．貴方は家に兄弟姉妹がありますか。　　その人は貴方より体が小さいですか大きいですか。

2．貴方の家では誰が一番いたずらですか。

3．貴方の家では誰が一番よい子ですか。

4．「よい子供」とはどんなことですか。
「よい子供」はどんなことをしますか。

5．「悪い子供」とはどんなことですか。
「悪い子供」はどんなことをしますか。

6．貴方のお母さんは貴方を大切にして下さいますか。そしてお母さんは貴方に言い付けたことをさせますか。

7．貴方のお父さんは貴方を大切にして下さいますか。そしてお父さんは貴方に言い付けたことをさせますか。

8．誰がお父さんやお母さんを一番大切にしますか。貴方ですか、他の子供ですか 。

9．貴方が悪い事をした時はどんな事が起りますか。誰が貴方を叱りますか。

10．貴方が悪い事をした時、貴方のお母さんはどうなさいますか。

11．貴方が悪い事をした時、貴方のお父さんはどうなさいますか。

12．貴方のお父さんとお母さんと、どちらがきつく叱りますか。

13．子供はお父さん、お母さんに叱られた後にどの様に感じますか。
そして貴方は。

14．子供を叱らなくてもよい時に叱る様なお父さんやお母さんがおりますか。
貴方のお父さんやお母さんはどうですか。

15．貴方のお父さんは貴方を叱る時に怒りますか。（不機嫌にかんかんになつて）

16．貴方のお母さんは貴方を叱る時に怒りますか。（不機嫌にかんかんになつて）
（問10参照）

17．子供はお父さんやお母さんから言い付けられた事はきつとしなければならないと思いますか。
そしてそれは何故ですか。

18．貴方のお母さんは貴方を叱る前に何故此の様なことをするか、そのわけを貴方におつしやいますか。
（問10参照）

19．貴方のお父さんは貴方を叱る前に何故此の様なことをするか、そのわけを貴方におつしやいますか。
（問11参照）

20．貴方はどんな子供でもいつもお父さんを恐しがつていると思いますか。
貴方はどうですか。　　どうしてですか。

21．貴方はどんな子供でもいつもお母さんを恐しがつていると思いますか。
貴方はどうですか。　　どうしてですか。

22．貴方のお父さんやお母さんは貴方の手伝いをして下さいますか。

23．貴方はお父さんやお母さんがもつとお手伝いして下さつたらよいと思いますか。

24．貴方はお父さんやお母さんが余り手伝つて下さらない方がよいと思いますか。

25．貴方のお父さんやお母さんは貴方が誰と遊んでも何もおつしやいませんか。
（答が否定ならば理由を聞く）。

26. 貴方のお母さんは貴方が常にお家のお道具をよごしたり、傷つけたりしない様におつしやいますか。
27. 貴方のお父さんやお母さんは遊び友達を家の中につれて来ると喜ばれますか。
28. 貴方はどんな事でもお母さんにお話する方がよいと思いますか。
29. 貴方はどんな事でもお父さんにお話する方がよいと思いますか。
30. 貴方はお母さんに沢山いろんな事をお聞きしますか。　お母さんはそれに答えて下さいますか。
31. 貴方はお父さんに沢山いろんな事をお聞きしますか。　お父さんはそれに答えて下さいますか。
32. 貴方は誰が一番好きですか。
33. 貴方は誰が一番嫌いですか。
34. お母さん達は誰が一番好きでしよう。　そして貴方のお母さんは誰が一番好きですか。
35. お父さん達は誰が一番好きでしよう。
    そして貴方のお父さんは誰が一番好きですか。
36. 貴方のお父さんは貴方と一緒にお遊びをしますか。
37. 貴方のお母さんは貴方と一緒にお遊びをしますか。
38. もし貴方が一杯のアイスクリームを大へん欲しがつてお父さんがいけないとおつしやつた時に、もし貴方がお母さんにおねだりしたらお母さんは何とおつしやいますか。
39. もし貴方が外へ行つて遊びたいと言い、お母さんがいけないと言われた時、もし貴方がお父さんにお願いしたらお父さんは何とおつしやいますか。
40. もし貴方のお母さんが、お母さんの処え来て手伝つて下さいと言われ、お父さんも、お父さんの処え来て手伝つて下さいと言われたら貴方はどちらのお手伝いをしますか。
41. もし貴方のお母さんが外で遊んではいけないと言われ、お父さんが家の中で遊んではいけないとおつしやつたら貴方は何処で遊びますか。
42. 子供が悪い事をしたらお父さんやお母さんはどうしたらいいでしよう。
43. 貴方のお母さんは貴方が悪い事をしたらこんな目に合わしますよとおつしやつたとき、何時でも後で言つた通りになさいますか。（問10参照）
44. 貴方のお父さんは貴方が悪い事をしたらこんな目に合わしますよとおつしやつたとき、何時でも後で言つた通りになさいますか。（問11参照）
45. 貴方がいたずらを見付けられた時は、お母さんから叱られる事が前から判りますか。
46. 貴方がいたずらを見付けられた時は、お父さんから叱られる事が前から判りますか。
47. もし貴方が外で遊んでいる時にお母さんが遊ぶのを止めて家の中におはいりなさいとおつしやつた時
    （a）もし貴方がお母さんにかまわず遊びを続けたならば。
    （b）もし貴方が泣きわめいたならば。
    （c）もし貴方が家に帰るのはいやです私は帰りません と言つたら。
    （d）もし貴方がお願いし、ねだりもつと外で遊ばせて居て下さいと言つたら。
    貴方がそのまま外で遊んでいてもお母さんは何とも言いませんか。
48. もし貴方のお父さんが玩具を全部片付けて寝に行きなさいと云われ貴方が寝に行きたくない時に
    （a）もし貴方がお父さんにかまわずに遊び続けたならば。
    （b）泣きわめいたならば。
    （c）私は寝たくない寝ませんと言つたならば。
    （d）お願いし、ねだりもつと遊ばせて下さいと言つたならば。

貴方のお父さんは貴方をそのまま遊ばせておいて下さいますか。

49. 貴方は何処にいるのが一番好きですか。

50. 貴方のお母さんは貴方の嫌いな事をなさいますか。　それはどんな事ですか。

51. 貴方のお父さんは貴方の嫌いな事をなさいますか。　それはどんな事ですか。

52. 貴方のお母さんは今のままの貴方が好きですか。　それとももつと貴方が違つている方が好きでしようか。どんな子供だつたらいいと言つていらつしやるでしようか。

53. 貴方のお父さんは今のままの貴方が好きですか。　それとももつと貴方が違つている方が好きでしようか。どんな子供だつたらいいと言つていらつしやるでしようか。

附表 C　子供の行動評価表

これは学校に於ける子供達の行動特性を調べるためのものです。おのおのの行動特性が、その強さの程度に応じて5段階に分けられています。各項目毎に、その子供に最も適当と考えられる段階の数字に○印をつけて下さい。

①	いつもおしやべりをするおしやべり屋	大分おしやべりだがおしやべり屋と言う程ではない	どうとも言えない。	だまつている方。	めつたに話をしない、物をいうに躊躇する。
	1	2	3	4	5
②	他の子供との対抗をいつも強く現す。	他の子供への対抗が相当強い。	どちらとも言えない。	他の子供への対抗を示さない方だ。	他の子供へ対抗を全く示さない
	1	2	3	4	5
③	他の子供へ影響力がない、全く従属的地位に立つ。		どちらとも言えない。		他の子供へ力強く働きかける指導的地位に立つ。
	1	2	3	4	5
④	活動的でない、言語動作がのらのらしている。		どちらとも言えない。		活動的、言語動作がすばやい、あらつぽくなる。
	1	2	3	4	5
⑤	他人との関係がおだやかで愛情的、人からやさしくされるのを好む。		どちらとも言えない。		やさしくない、愛情的でなく人からやさしくされるのを好まない。
	1	2	3	4	5
⑥	はずかしがり、引つ込み勝ち他人がいると当惑する。		どちらとも言えない。		人前でもつてしつかりしている決して当惑しない。
	1	2	3	4	5
⑦	大人を頼り、助けや指導を求め、ほめられたがる。		どちらとも言えない。		大人より独立的、自分の事を自分でして了う。
	1	2	3	4	5
⑧	他の子供達に非常に人気がある。		どちらとも言えない。		全く子供達に人気がない。
	1	2	3	4	5
⑨	他の子供と折合が悪く、いつもけんか、言い合いをする。		どちらとも言えない。		他の子供達と折合がよく、決してけんか、言い合いをしない。
	1	2	3	4	5
⑩	他人に親切、同情的、おもいやり深い。		どちらとも言えない。		他人に思いやりがなく全く同情せず、利己的。
	1	2	3	4	5

⑪	大人の支配に反抗的、権威に服従せず、禁止された事を平気でやる。		どちらとも言えない。		大人の支配に反抗しない、服従いいつけられた事はすぐ行う。
	1	2	3	4	5
⑫	いつも嬉しそうな幸福な気分		どちらとも言えない。		みじめな不幸な気分。
	1	2	3	4	5
⑬	他の子供から攻撃される時、何時も、自已を防禦する。		どちらとも言えない。		他人から攻撃される時、全く防禦出来ない。
	1	2	3	4	5
⑭	気分易変的、直ちに泣いたり得意になりかんしやくを起す		どちらとも言えない。		気分を動かさず、安定的、おちついている。
	1	2	3	4	5
⑮	社交的、友達が直きに出来る友達と一緒の行動を喜ぶ。		どちらとも言えない。		隠遁的、一人で遊ぶ、友達が出来ない。
	1	2	3	4	5
⑯	全く大人ぽい、ませている、大人の風をしたがる。		どちらとも言えない。		おてんば、やんちや。
	1	2	3	4	5
⑰	非常に大胆、向う見ず。		どちらとも言えない。		非常に用心深く、新しい事をする時、非常に躊躇する。
	1	2	3	4	5
⑱	周囲の事に敏感、何時も周囲の事に興味がある。		どちらとも言えない。		周囲の事に全く関心をもたぬ、ぼんやりしている。
	1	2	3	4	5
⑲	他人の批評、賞讃、非難、意見に敏感。		どちらとも言えない。		他人の批評、賞讃、非難、意見を全く気にかけない。
	1	2	3	4	5
⑳	能動的、はでな人目につく行動が激しい。		どちらとも言えない。		受動的、行動が人目に立たない
	1	2	3	4	5